昭和四十二年三月

造山第三号墳調査報告

島根県教育委員会

昭和四十二年三月

造山第三号墳調査報告

島根県教育委員会

目　次

一　調査に至ったいきさつ……一
二　調査の経過……二
三　位置と環境……九
四　墳　丘……一四
五　内部構造……一八
六　遺　物……二四
七　結　語……三〇

図版目次

第一　造山遠望・第三号墳全景
第二　空中から見た造山
第三　墳丘実測図
第四　墳丘東斜面および東側列石
第五　南側第一列石および第二列石
第六　南側第三列石および西側列石
第七　墳丘頂上面およびⅠ・Ⅱトレンチ発掘状況
第八　墓壙と石室の蓋石（一）
第九　同　（二）
第一〇　同　（三）

第一一　石室実測図
第一二　石室内部の状態
第一三　遺物出土状態
第一四　鏡出土状態・石室側壁
第一五　排水構造（一）
第一六　同　（二）
第一七　遺　物（一）
鏡・土　師　器
第一八　遺　物（二）
鏡　細　部
第一九　同　（三）
玉　類
第二〇　同　（四）
鉄　器
第二一　山陰の古式竪穴式石室

挿　図　目　次

第一図　墳丘調査区分図……五
第二図　造山古墳の環境……一〇
第三図　列石実測図……一五
第四図　墳丘土層実測図……一七
第五図　墓壙実測図……一九
第六図　石室蓋石粘土被覆状態実測図……二〇
第七図　石室蓋石実測図……二〇
第八図　石室上面実測図……二〇
第九図　石室外部東側排水溝断面実測図……二一
第一〇図　石室外部南側排水溝実測図……二二
第一一図　南側第一列石附近の排水溝実測図……二三

第一二図　石室内遺物出土状態……二四
第一三図　土師器型式図……二五
第一四図　土師器参考図……二六
第一五図　鏡断面実測図……二七
第一六図　管玉実測図……二七
第一七図　鉄器実測図……二九

凡　例

一　この報告は、島根県教育委員会が安来市教育委員会との共催で、昭和四十年七月、八月に行なった安来市荒島町造山第三号墳の発掘調査に関するものである。

二　発掘調査は、山本清・井上狷介・岩佐文子・島重海・池田満雄・近藤正・門脇俊彦・蓮岡法暲・糸賀達典・川井昭道・田中信道・勝部康雄・内田才・住田正男・松本興・三島育子・永田由美子が調査員としてその任にあたり、島根大学、安来高校、松江北高校、松江南高校・松江工業高校・安来第三中学校等の学生生徒、その他諸方面の参加協力により実施した。

三　この報告書の執筆は山本が担当した。

四　遺物の整理と実測は近藤が主となって行なった。

五　実測図の浄写はすべて近藤が担当した。

六　写真撮影は山本が担当した。

一　発掘に至ったいきさつ

造山第三号墳の存在が判明したのは昭和三七年晩秋のことであった。造山第一号墳は早くその第一号石室が発掘され、鏡・管玉・刀などが出土して注目され、昭和一一年一二月一六日附で国の史跡に指定されたのであるが、その後同じ墳丘で第二号石室が発掘されて一層注意されるようになった。それは相当大きな古墳でありまた種々な遺物が出土したということばかりでなく、石室は二つとも典型的な細長い竪穴式石室という古式の特徴をもつものであり、かつまたその墳丘が方形墳であるという点で重要視されるようになったのである。しかしながらこの第一号墳と嶺続きの近い位置に並んでいる第二号墳と第三号墳の存在は一向に知られていなかった。ところが島根県教育委員会は『島根の文化財』第三集を編集し、それに造山一号墳の写真とともに墳丘実測図を掲載することとなったので、昭和三七年の秋数日を費してその測量をなした。その際附近を踏査して第二号墳の存在が判明し、また測量のためトランシットをすえようとして第三号墳が判明したのである。第二号墳は前方後方墳であり、第三号墳は方形を呈していることがわかり、第一号墳が方形であることとあわせて、三者ともに方形の特徴をもつものであり、いずれも相当の大きい古墳でそれが相並んで尾根続きに営まれていることは、たがいに密接な関係のある古墳と思われ、すでに知られていた第一号墳が注目に価する古墳であったが、ここに一群の古墳として一層その重要性を加えることとなった。

島根県教育委員会では、行政上の立場から昭和三六年度から県下の遺跡について年次計画を以て組織的な発掘調査を行なってきたのであって、すでに三六年度に松江市の薄井原古墳、三七年度には飯石郡三刀屋町の松本古墳、三八年度において出雲市の妙蓮寺山古墳の調査を実施したのであった。これに続いて調査を実施するについては、古式古墳の多い安来地区が適当と考えられ、この造山第三号墳を調査することとしたのである。調査の対象たる遺跡は、所要経費や調査日数等の制約もあることとて、あまり規模の大きなものは避けねばならないが、すくなくとも調査によって、県下の当代文化を解明する上に有力な拠り所となるような成果の得られることが望ましいのであるから、古墳を発掘する場合ある程度の規模をもつものであることも必要と考えられた。その点第三号墳はかなり条件をみたすものである。また造山の古墳群は、その中の第一号墳の内容が判明していて、当地方の当代文化を考える上には極めて重要な拠り所となってはいるけれども、学術的な発掘を行なったものでないので、種々不明な点が少なくない。それゆえ、同じ一連の古墳群中の第三号墳が明らかにされるならば、それによって第一号墳の知見を補うことも考えられ、また第一号墳と相まって、県下の古墳文化を解明する上には有益な知見の得られることも期待されたのである。

まず昭和三九年六月二〇日、島根県文化財専門委員山本清、県教育委員会社会教育課文化財係長井上狷介、安来市教育委員会教育次長門脇顕正、安来市文化財専門委員内田才の四名で第三号墳を予察のために踏査し、略測図を作り、発掘調査についての諸般の条件を検討した。然るところ、三九年の夏には県下は未曾有の台風禍に見舞われたため、同年度の調査は翌年に繰り越すこととなり、昭和四〇年の夏にこれを実施するにいたったのである。

二　調査の経過

発掘調査を行なうために左記のように調査団を編成した。

調査団

団長　島根大学助教授　山本清

団員　県立松江工業高等学校教諭　岩佐文子
瑞穂町立高原中学校教諭　門脇俊彦
安来市文化財保護委員　内田才
〃　松本興
県立安来高等学校教諭　川井昭道
大田市立志学中学校教諭　蓮岡法暲
安来市立第三中学校教諭　勝部康雄
仁多町立阿井小学校教諭　永田由美子

事務局　島根県教育委員会　社会教育課文化財係長　石塚尊俊
〃　主事　長谷川清

参加　島根大学学生　安来高校生徒　松江北高校生徒
松江南高校生徒　松江工業高校生徒　安来第三中学校生徒

団員　県立平田高等学校教頭　井上狷介
県立松江南高等学校教諭　池田満雄
島根県立博物館学芸員　近藤正
安来市文化財保護委員　住田正男
県立松江北高等学校教諭　島重海
県立安来高等学校教諭　田中信道
出雲市立第二中学校教諭　糸賀達典
柿木村立柿木中学校教諭　三島育子

安来市教育委員会　教育次長　門脇顕正
〃　主事　池田竜治
〃　市川博史

任務分担

庶務

連絡渉外、給食　　県教委　石塚係長、同　長谷川主事

人夫管理、間食支給　　安来市教委　門脇次長、池田主事

会計　　県教委、市教委分担

調査

発掘指揮、成果発表　　山本

記録、生徒補導　　井上、岩佐

資材管理　　蓮岡

発掘調査　　全員

（島大学生は勝部昭、佐藤悦子、石井悠、長谷川徳四郎、今岡稔、勝部肇、拝藤律雄、稲田昭）

以上の構成により、地元安来市以外の団員は原則として安来市荒島公民館に合宿して調査を行なうこととした。調査は七月二八日に開始し、七月中には草木の刈り取り墳形測量等を主とし、八月一日以降主要部の発掘を開始することとし、八月一〇日まで連続して調査を行ない、主要部の埋め戻し作業も一応完了した。この間調査団員の参加状況は上の通りである。

調査の方針として、経費・予定日数を考慮して、墳形ならびに墳丘築成の様式および墳丘の施設に関してはその要点をたしかめ、内部構造および副葬品の詳細を明らかにす

月日	7月28	29	30	31	8月1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
山本														
井上														
岩佐														
島														
池田														
近藤														
内田														
川井														
田中														
蓮岡														
糸賀														
門脇														
勝部														
三島														
永田														
石塚														
長谷川														
島大	5	6	4	5	5	4	4	4	4	5	4	4	5	6
松江北高		16	4	3			3	18	6					
松江南高						4	3	1	1					
松江工高	6	6	6	5		6	6	6	6					
安来高	3	10	4	7		12	8	17	23					
安来三中	10	13	10	9										
(安来一中)						10	9							
(東出雲中)						1	1	1	1					
(出雲工高)									1					

調査団員参加状況表

ることを目標とした。そこで発掘作業の力点をできるだけ中央部におくこととし、まず方形の墳丘の北辺に平行し墳丘の中央部を通過して、墳丘の大部を東西に横断する幅一・五メートルの第Ⅰトレンチを設定し、これを基幹として調査を広げることとした。第Ⅰトレンチの墳頂部を中心とする長さ一五メートルの範囲を五メートルずつに三分し、西方からI_1・I_2・I_3の三区とし、I_1から西方へ延長した部分をI_{E1}・I_{E2}・I_{E3}とよぶこととした。

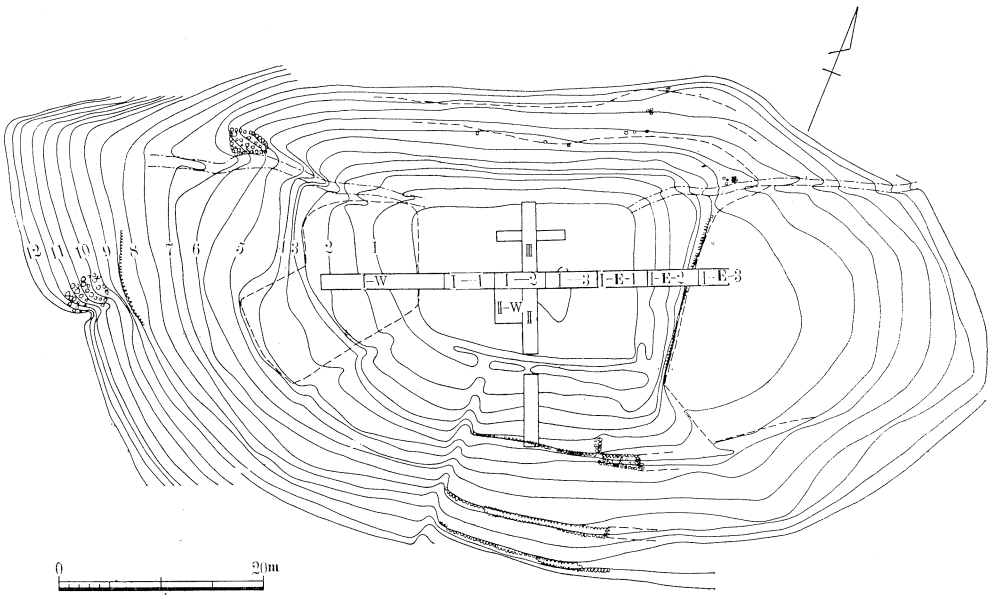
まずI_1・I_3・I_2を中間に畦を残して掘り下げ、I_3において深さ約三五センチに達したとき墓壙の東壁の上縁を検出し、次にI_2とI_1との界のあたりに墓壙の西壁の上縁を検出した。さらにI_2を深さ約七〇センチまで掘り下げて蓋石の一部を発見した。そこでⅠに直角に幅一・五メートルのトレンチ（Ⅰの東端から一メートルを東の側線とした）を南方に設定しこれをⅡトレンチとよび、同様に北方に設定したトレンチをⅢトレンチとよぶこととした。Ⅱトレンチにおいて石室蓋石列の上を覆う粘土を検出し、竪穴式石室であることが推定されるにいたったので、Ⅱを西方に拡張してまず蓋石被覆の粘土を全面的に露出させ、さらに四方へトレンチを拡張して墓壙のほぼ全形を露呈させた。この間に、石室の中央部からその東の方にかけての埋め土層に土師器の小片が多数検出された。以上の作業と平行して、Ⅲトレンチの発掘により墓壙の北壁の上縁を検出し、トレンチを拡張して墓壙北部も完全に露呈させた。

このようにして、まず中央の主体構造に関する墓壙の全容と六枚の石室蓋石の上面を完全に露呈させ、南と北と両端の蓋石はそれぞれそのままとし中央部の蓋石四枚を撤去した。石室の底には若干の封土が流入していたけれども、石室中央部の床面に僅かに傾斜して遺存した鏡は、埋没することなくその上面を露出している程度であった。石室の側壁は、極一部にやや弛んで内側へはみ出した石もあったけれども全体として確実に原形を保っていた。それ故容易に流土を排除して遺物と床面の細部を調査することができた。

墓壙および石室は、墳丘の現形における上面からすれば中央よりもかなり南に偏しており、墓壙よりも北にかなり広い面積を残しているのでⅢトレンチに直交する$Ⅲ_E$・$Ⅲ_W$トレンチを設定して検討したが、耕土の下はすべて地山で、埋葬構造は認められなかった。

なおI_W・I_{E1}・I_{E2}の各トレンチにより土層を調べ墳丘の築成について検討したが、耕土の下はすべて地山であることが判明した。

次に、石室の室底の礫床を除いたところ、室の中央を縦断する排水溝が検出され、また東壁の扣積の外側の埋土を除いたところ、そこにも扣積の縁辺に沿うた排水溝があらわれ、一方石室南端の外側を発掘し、そこに東西両側の扣積の外を通った排水溝と室底から通ずる排水溝との三者が合流して一本の暗渠となり、墳丘南斜面の下を下降する構造があらわれた。そこで、墳丘の南斜面の第一列石の上下両側を発掘し、件の暗渠がここまで下降しており、さらに下方へ通じている状態が明らかとなった。



第1図 墳 丘 調 査 区 分 図

墳丘斜面には石垣状の列石が認められるので、ごみや若干の土を取り除いて明瞭にする程度で特別に発掘は行なわなかった。調査日数を考慮せねばならなかったからである。

日をおうての調査の進行状況はおよそ次のようであった。

七月二八日（水曜）晴一時曇

器財・宿泊用荷物などを自動車に積み、石塚・長谷川・近藤・山本が同乗し、九時半島根大学を出発、一〇時荒島公民館に到着。一一時から古墳の現地において結団式および修祓式を行なう。県教委社会教育課長補佐尼ヶ崎正義、文化財係長石塚尊俊、主事長谷川清、安来市長杉原寛一郎、安来市教委次長門脇顕正、文化財係市川博史、調査団員とともに参列。午後から作業開始。

① 墳丘上面から始めて草刈。

② 墳形測量。二〇〇分の一で五〇センチごとに等高線を描くこととし、最高所を零とし一メートルの線を約半周まで描く。

七月二九日（木）晴

① 墳丘伐採――周囲の平地までとくにひどいものを切除。

② 墳丘測量――二メートル線まで。

③ 列石露呈――東側第一列石。

④ Iトレンチ設定。

七月三〇日（金）曇後晴

① 墳丘測量――三メートル線全周。東側と南側は四メートル線まで。

② 列石露呈――東側および南側。

③ 第Iトレンチ――全面表面を削り草根を除く。

I_1・I_2・I_3・I_{E1}は南半を、I_{E2}は北半を、耕土深さ約四〇センチ内外を撤去。

七月三一日（土）　快晴

① 墳丘測量――東側四・五メートルまで、南側八・五メートルまで。

② 列石露呈――東側。なお南側には第二、第三の列石あること判明。

③ Iトレンチ――I_3において墓壙東壁上縁検出（深さ地表下約三五センチ）。I_1とI_2との界のあたりに西壁上縁を検出（深さ約四〇センチ）。I_2において蓋石の一部を検出（深さ約七〇センチ）。

八月一日（日）　快晴

① 墳丘測量――東と南の下部。

② IIトレンチ――I_2の南に幅一・五メートル、長さ五メートルのIIトレンチを設ける。I_2に出ている蓋石の深さまで掘り下げる。西半に粘土被覆あらわれる。南端に遊離した石あり。

③ IIIトレンチ――I_2の北方へ幅一・五メートル、長さ四メートルのIIIトレンチを設定。墓壙北壁を検出。

④ トレンチ土層実測――I_2北・南壁。I_3北・南壁。I_Eの北・南壁。

八月二日（月）　曇時々晴

① 墳形測量――西側下部。

② IIトレンチ――西側へI_2の西端まで拡張しII_Wと称する。墓壙西壁に沿うて上部の土を排除。蓋石の上方と思われるあたりに土師器の破片散乱。

③ トレンチ土層実測――II、IIIの東西壁。

八月三日（火）　晴

① 墳形測量――西側下部の残り。北側六メートルまで。

② IIトレンチ――南へ延長排土。

II_W――墓壙の西壁露呈。

③ I_3――墓壙の北壁露呈、途中まで。

④ 本日から現地に不寝番をおく。島大生石井・今岡・勝部。

八月四日（水）晴

① 墳形測量――北側六・五メートルまで。
西南側八・五メートルまで。

② II・II_W――粘土被覆実測。
II_E――IIの東方へ拡張しII_Eとよぶ。墓壙東部に当る部分上部排土。

③ I_3――南壁土層図補正。

④ 東側列石――実測。

⑤ 不寝番――蓮岡・今岡・勝部。

本日より鳥取県立科学博物館亀井熙人氏参加。また松江南高校杉原氏加勢。

八月五日（木）晴　甚だ暑し。

① 墳形測量――東北隅下部。

② II II_W区――石室蓋石清掃実測（粘土被覆状態。蓋石）。

③ II_E区――墓壙東壁探索。埋土排土大部分完了。

④ 不寝番――石井・今岡・勝部。

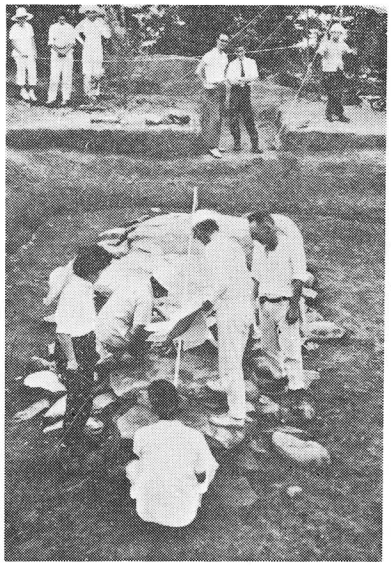
八月六日（金）曇風強し（台風一五号）

① 墓壙――南壁を露呈。壙内の埋土を蓋石の下面の高さまで排除し、墓壙の全形を的確にし、清掃して撮影。

② 石室――蓋石周囲の石を補足実測し、チェーンブロックにて蓋石の撤去（南端と北端の蓋石は残しておく）。

③ 不寝番――石井・今岡・勝部。

本日台風九州より山口県を通過し隠岐附近を抜けるという。正午前から烈風となり雨をもよおす。昼食後の休憩を廃して作業を進め、四時



調査の状況 1
蓋石の実測

ごろ心配された蓋石撤去を終ったので、石室上にテントを張り排水処置を講じて人夫の作業を打切り、調査員のみ残って室内を試掘し明日にそなえる。

八月七日（土）　晴

①　石室――内部発掘。室外排水溝（南側）発掘。外側扣積の石を実測。

②　I_W――地山まで発掘。

③　I_{E2}――実測。

④　不寝番――蓮岡・糸賀。

八月八日（日）　快晴

①　石室――内部発掘完了。撮影。遺物採取。

②　南排水溝――石室の南接部と第一列石附近を発掘。

③　列石――南側の列石清掃。南第一列石、第三列石実測。

④　I_E――実　測。

⑤　I_W――実　測。

⑥　III_2――実　測。

⑦　不寝番――門脇・石井・今岡。

本日西川宏氏来会加勢。

八月九日（月）　曇後晴

①　石室――内部再検討。実測。外部横断面検討、外側排水溝検出（東側）。

②　南方（中央）排水溝――末端を検討。第一列石の下を通って下方に向かうこと判明。

③　III_E・III_W――いずれも耕土の下は地山であって主体構造は存しないこと判明。

八月一〇日（火）　曇

①　石室――実　測。

調査の状況 2
蓋石撤去作業

② 南排水溝――実　測。
③ 測量――水田から墳頂までの比高（四二・一メートル）。第一号墳との距離（一二七・八メートル）。
④ 蓋石復原。埋戻し作業。

八月一一日（水）曇

器財等を運搬し、各自帰宅。

以上のようにして、ほぼ予定日数の間に調査を終了し、古墳についての基本的な事項については一応これを明らかにすることができた。

三　位　置　と　環　境

造山第三号墳の所在地籍は、島根県安来市荒島町字造山二〇七三番地（山林、金山久雄所有地）およびその隣接地若干である。荒島の町の北方にあたり標高六〇メートル余の丘陵があるが、この丘陵の頂上部から西方にかけて三基から成る造山古墳群が営まれている。右の丘陵頂上部から西方丘陵の端が長くのびて水田の中へ半島状に突出している。（図版第一～二）

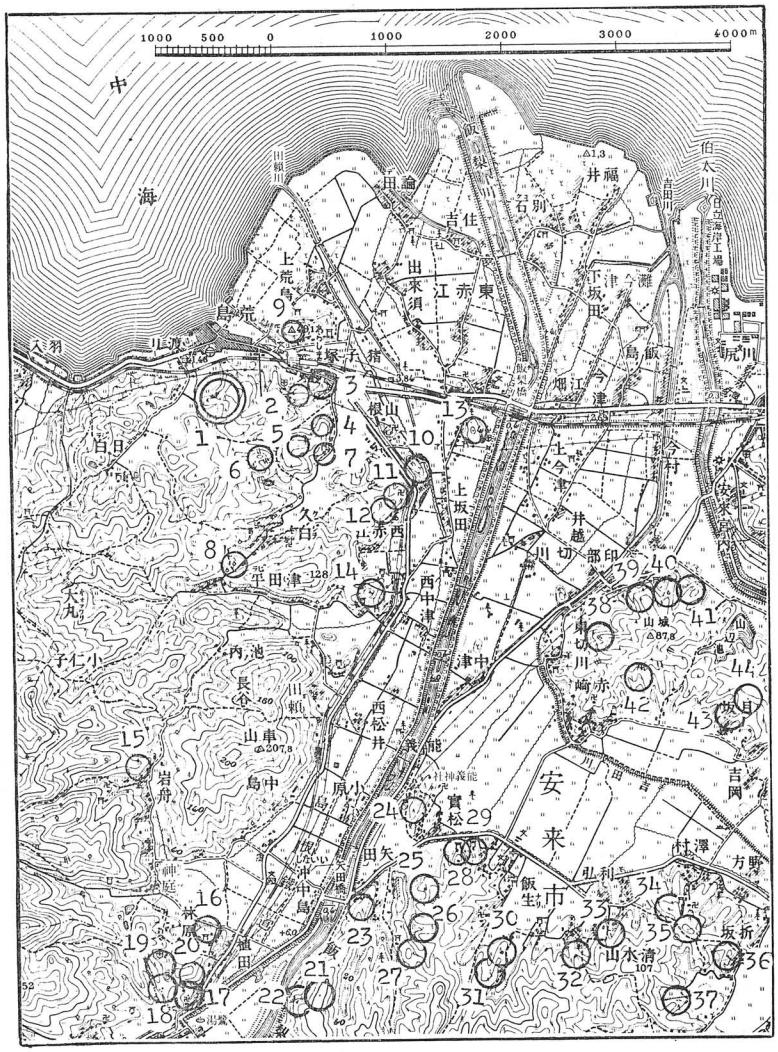
第三号墳はこの丘陵先端部頂上にあり、周囲の水田からの比高四一メートルばかりの高さをもっている。第三号墳の東北方鞍部をへだてて約一二〇メートルばかりの所に第一号墳があり、第三号墳よりも一〇メートルばかり高い位置を占めている。この第一号墳の東方一〇〇メートルばかりの所は、標高六〇メートルばかりの丘陵で、そこに第二号墳がある。

第一号墳（注1）は底辺およそ六～七〇メートル、頂辺約三〇メートルの方形墳であって、墳頂に二つの竪穴式石室がある。墳丘には数段に石垣状の列石をめぐらしている。また墳丘上部から検出された土器片は埴輪と考えられていたが、古式土師器の壺に見られる口縁部（断面が5の字形を呈するもので、二重口縁などともよばれるもの）をもち櫛による羽状の刺突文様をもつ一種の円筒棺とも思われるものである。二つの竪穴式石室のうち、早く発掘された第一号石室は、幅約一メートル、高さ約一メートル、長さ約七メートルあり、扁平な割石を小口積みにした典型的な古式の竪穴式石室であるが、断面がU字形にくぼむ床面は礫を敷き、その下に割石の排水溝を設けたものである。方格規矩鏡一面、三神三獣獣帯鏡一面のほか、ガラス製管玉（太形）、鉄刀等が出土した。第二号石室は第一号よりやや小形ながら、ほぼ同様の石室で、床面は砂を用いたものであった。方格規矩鏡一面、碧玉製紡錘車一、ガラス管玉（細形）、刀剣身などが出土した。これら出土品は東京国立博物館に収蔵され

ている。

第二号墳はまだ実測されていないので、正確なことはわからないが、西南方向きの長さ五〇メートルばかりの前方後方墳と思われるものであって、円筒埴輪が認められる。

さて造山古墳群のある位置（第2図）は　伯太川と飯梨川の下流域の沖積平野の西北隅にあたっているが、この平野の周縁にある丘陵は、多



第2図　造　山　古　墳　の　環　境

1　造山　2　大成　3　仏山　4　塩津方墳　6　若塚
7　塩津神社前　10　西赤江宮山　15　岩舟　17　鷺湯病院跡
18　西かわらけ谷横穴　21　椿谷　22　宮谷　23　矢田古墳群
24　能義神社丘陵　35　鍵尾　38　小谷

くの注意すべき古墳を含んでいる。この平野の北部――中海沿岸には、近世にできた新田も相当にあり、元来飯梨川や伯太川は相当の砂を流す川であることによるのであるが、しかし出雲の西部にある斐伊川にくらべると、洪水の害はそれほど甚だしかったとはいえない。東西約六キロ、南北六キロばかりのこの安来の平野は、西方の斐伊川、神戸川流域にある簸川平野にくらべると小規模ではあるが、出雲では第二のまとまった水田地帯であり、しかも比較的安定した水田地帯であることが注意される。古式の古墳は、西の簸川平野には少なく、この安来平野の縁辺に多いのであって、それは右のような比較的安定した水田地帯であることと関連するのであろう。そこで、造山古墳の附近、安来平野の西部方面の古墳を挙げてみると次のようである。（番号は第2図に示すものと同じ）

1　造山古墳群

2　大成古墳（注2）――安来市荒島町。丘陵上に営んだ底辺三六・五メートル、頂辺約二三・五メートルの方墳であって、扁平な割石を小口積みにした細長い竪穴式石室を主体とし、舶載の二神二獣鏡一、鉄製素環頭大刀一、刀身三、土師器の小形丸底壺三、高坏形土器二等を出し、古式の方墳として早くから注目されたものである。

3　仏山古墳――荒島町。丘上にあり円墳と思われるもので、石垣状の列石があり埴輪円筒も認められる。やや大きな空間をもつ一種の箱式棺を主体とし、鉄地金銅張結紐状の杏葉、獅嚙式の環頭、斧頭、轡残欠等が出土した。今は墳丘の大半を失い、遺物は東京国立博物館に収蔵されている。

4　塩津山方墳――久白町。丘上に営んだ底辺約四〇メートル、高さ約三メートルの方墳で、葺石らしいものも認められる。

5　塩津山古墳群――久白町。丘陵の尾根筋に小形の円墳が三基ばかりある。

6　若塚古墳（注3）――久白町。丘陵上の小形の円墳である。石棺式石室を主体とする。玄室は四注式妻入りの刳り抜きの家形棺状のものに横口を設けたもので小形ながら入念に加工され、中にあたかもまな板のような形の低脚をもつ石床がある。羨道は割石を用い、半壊している。

7　塩津神社前古墳（注4）――久白町の塩津神社前の道ばたにある。丘麓の古墳で、今は封土を失い石室が完全に露出しているが、墳丘の残存部からは埴輪の円筒片が発見される。主体は石棺式石室で、玄室部のみ遺存する。凝灰岩の切石四枚で四壁と底を構成し、蓋石は外面も四注式家形に削った立派なものである。石棺式石室としては、大きさ構造ともに典型的なものである。

8　山ノ神古墳――久白町。丘麓にあり、円墳と思われる。径約二〇メートル、高さ約三メートルの墳丘で、石室の蓋石が露出し、上に小祠を祀る。ここから出たという土器の破片と直刀の残欠を荒島小学校に保管する。

9　高塚山古墳――荒島町。山の頂上にあり、墳形は破壊されて不明。荒島石の切石を用いた石室の基部を遺存する。石棺式石室と思われる。室の内法幅約二メートル、長さ約二・七メートルあり、石材の厚さ約三〇センチである。

10　西赤江宮山古墳――赤江町。元「神塚古墳」と呼ばれた。独立丘陵頂上に営んだ前方後方墳で、長さ約六〇メートルのものであったが今は中学校の建設により消滅した。墳丘には埴輪の円筒を用い、象形埴輪（器財）も検出された。墳丘の周囲には列石をめぐらすものである。地山を切削して墳丘の基底部を形成し、その上に大量の盛土を施したもので、盛土の深さは深い所では四メートルに及んでいたが、もとはさらに一メートル以上の高さがあったものと推定される。孟宗藪としたため墳丘上面も甚だしく削られていて、内部構造はすでに失なわれていた。墳形、築成の様式、封土から発見された土師器類等諸種の点から古墳時代中期の中ごろ乃至後半期のものと考えられる（注5）。

11　仲仙寺古墳――西赤江町、仲仙寺脇の丘陵上にあり、径一六メートル、高さ約二メートルの円墳で、主体は切石を用いた一種の箱式棺であるが、蓋には両側に一つずつ突起をそなえたものである。

12　深迫古墳――西赤江町。丘上にあり、墳丘はほとんど破壊されているが、小形の円墳であったと思われる。人物埴輪の残欠が出土している。

13　武嶺山横穴――西赤江町。二穴あり、須恵器等出土。

14　中津八幡山古墳群――中津町。円墳、横穴。

15　岩舟古墳――岩舟町。低い丘陵部にあり封土を失う。整った石棺式石室である。前室は床石を残して破壊されてなくなっているが、奥室には特殊な家形石棺をおくものである。昭和二三年一二月一八日附で史跡に指定されている（注6）。

16　植田宮山古墳群――円墳と横穴とある。

17　鷺ノ湯病院跡横穴――植田町。横穴の中に組合わせの家形石棺一基を置いたもので、今は穴は半壊し、石棺は飯梨小学校に移されている。遺物は東北大学考古学研究室の所蔵となっている。小形仿製鏡、こはく裹玉（なつめ）、太形中空金銅環、金銅製冠立飾、銀被覆の鞘をもつ単龍冠式の優秀な環頭大刀。その他金銅装等の刀数口の残欠、直弧文を刻した小形の鹿角装刀子、鞍金具、辻金具の残欠等極めて優秀な副葬品であって、横穴としては注目すべきものである（注7）。

18　西かわらけ谷横穴群――植田町。一六穴あり、中の一穴からは、金環二、玉類、環頭大刀が出土した。環頭大刀は双竜環式で保存甚だ良好であり、鞘から抜くことができ、今は泉大津市の細見良の所蔵となり、重要文化財に指定され、身は研ぎ上げられている。

19　東かわらけ谷横穴群――植田町。

20　かわらけ谷横穴群――植田町。

21　椿谷古墳――矢田町。丘上にあり、扁平割石小口積長さ四・三メートル、幅一メートル、高さ九〇センチの竪穴式石室があり、鉄鏃、土師器片が採集されていて、古式様相の古墳として注意される。

22　宮谷古墳――矢田町。丘陵上にあり、前方後方墳であることが注意される。

23　矢田横穴群――丘陵の尾根には、土師器壺棺（注8）、地山を僅かに加工して盛土を施した古墳があり、丘腹には数十の横穴がある。横穴には家形石棺を蔵するもの四穴あり、石棺の極めて整備なものもあって注意すべき横穴群である（注9）。

24　能義神社丘陵古墳群――能義町。能義神社奥ノ院古墳と称する二重に湟をめぐらす円墳（外湟径五五メートル、内湟径二九メートル）、上ノ谷古墳と称する径一六メートル、高さ一・五メートルの円墳に家形石棺の蓋に似た四個の突起のある蓋をもつ一種の箱式棺を主体とし玉類等の出土の伝えられる古墳、その他小円墳群等を含んでいる。

25　祝部横穴群――飯生町。

26　長江山横穴群――〃

27　大平横穴――〃

28　飯生八幡宮山横穴群――〃

29　意多岐神社山古墳群――〃　小形円墳数基。

30　宮谷横穴群――〃

31　築山横穴――〃

32　西宮谷横穴群――利弘町。

33　古寺谷横穴群――〃

34　天神山古墳・天神山横穴――沢町。前者は径約二五メートルの円墳であるが、丘上にあり、頂上面に地山面があらわれ盛土少なく、埴輪をめぐらしたもので、古式の様相を呈するものとして注意される。

35　鍵尾土壙墓群――丘陵頂上に土壙墓の群集するもので、昭和三七～三八年に山本が調査した。初期の土師器が多量に検出され、山陰の土

墳墓群として注意すべきものである（注10）。

36　社日山古墳――折坂町。方墳である。

37　奥田山横穴群――〃

38　小谷土壙墓――切川町。丘上にあり、昭和三九～四〇年に近藤正によって調査された。土壙の中に組合木棺を仕組んだもので、上古初期の仿製鏡と考えられる内行花文鏡や刀子・鉇が壙内から検出され、また墓上に供献された土師器類は土師器の初期に近いものである（注11）。

39　加茂舟形棺・同箱式棺――加茂町。丘上にあり、古式の様相を呈することが注意される。

40　源三谷横穴――加茂町。

41　飯島山横穴――〃

42　赤崎横穴群――赤崎町。

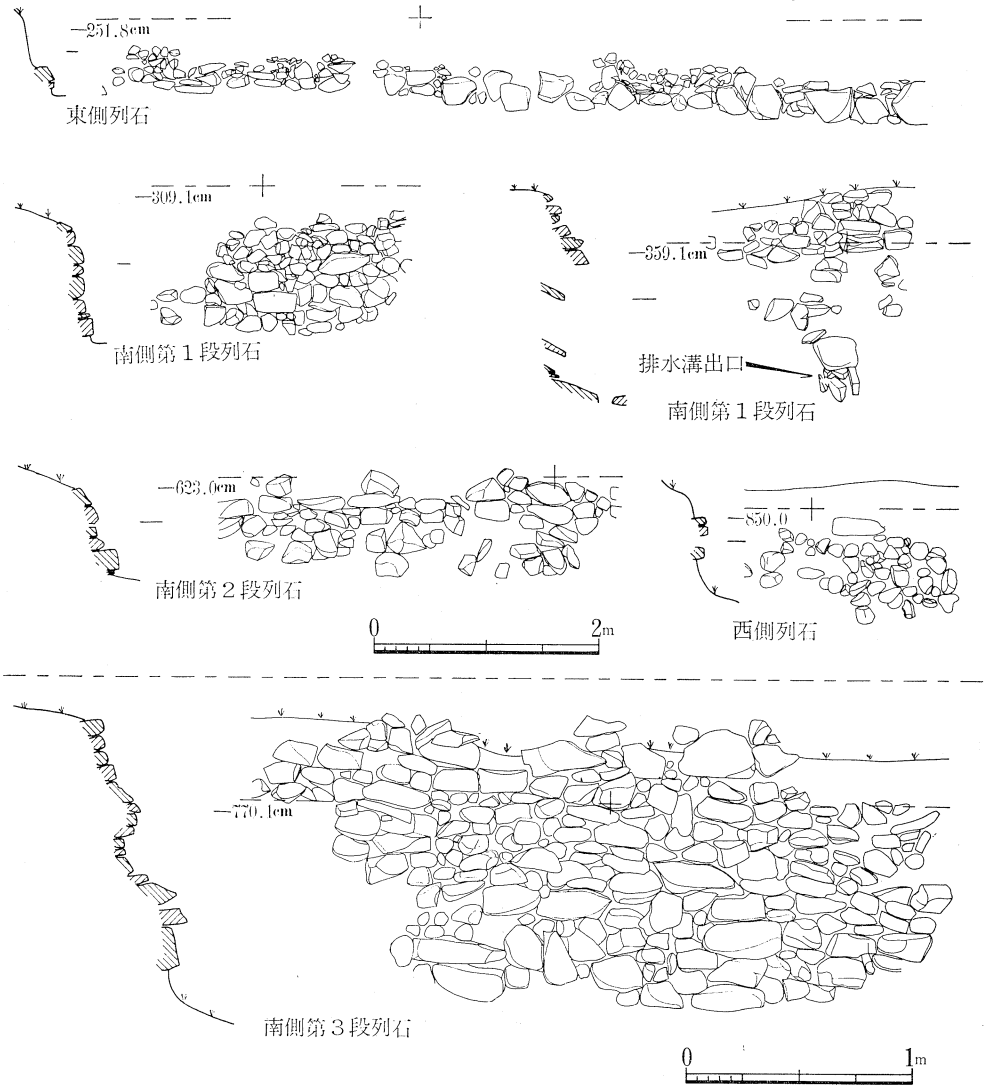
43　大荒神横穴群――月坂町。

44　中尾奥横穴・日仮屋横穴――〃

以上は安来平野西部における古墳の大体の姿を示すためにあげたのであるが、未調査の区域もあって（たとえば田頼山の麓方面等）この平野の縁辺の丘陵には、いたる所に古墳が分布しているといってよい。その中にあって古式の様相のものも少なくないが、規模の大きなものは、造山古墳群が代表的であり、またその附近に西赤江宮山古墳や塩津方墳、大成古墳など比較的大きなものが集っていることも注意される。安来平野の西部では、後期古墳には墳丘の顕著なものは殆んどなく、この点簸川平野方面と極めて対照的であるが、小規模でも石棺式石室の整美なものや、横穴でも石棺をもつもの、優秀な副葬品の出土したものがいくつもあることが注意される。ともかくも、造山およびその附近の地域は、出雲国中でも、もっとも古い様相の古墳としては大形のものが集中しているように見受けられることが注目さるべきであろう。

四　墳　丘

墳丘は一種の方形墳であって、すでに石垣状の列石をそなえたものである（図版第三）。列石を目安としてその広さをいうならば、少なくとも東西約五八メートル、南北四四メートルばかりを墓域として加工し施設をなしたものである。頂上部と東西の両斜面および南斜面の西部等


−251.8cm
東側列石
−309.1cm
南側第１段列石
−359.1cm
排水溝出口
南側第１段列石
−623.0cm
南側第２段列石
−850.0
西側列石
0
2m
−770.1cm
南側第３段列石
0
1m

第３図　列　石　実　測　図

は、畑や孟宗藪として開墾されたため、かなり原形を損じたものと思われるが、一応現況について記すこととする。頂上面は、東西二二〜二三メートル、南北一五〜一六メートルのほぼ長方形の平面をなしている。この頂上面のうち、大体に元の姿を保っていると思われるのは北の一辺と東の一辺とであるが、それはたがいにほぼ直角をなしている。なお西側でも最高所から五〇センチの等高線も北の辺にほぼ直角をなしている。頂上面の西部の南側は隅角部が北の方へ寄って西の辺は短かくなっているのは、このあたりが孟宗竹の藪になっており、客土などのため削られたためと思われる。

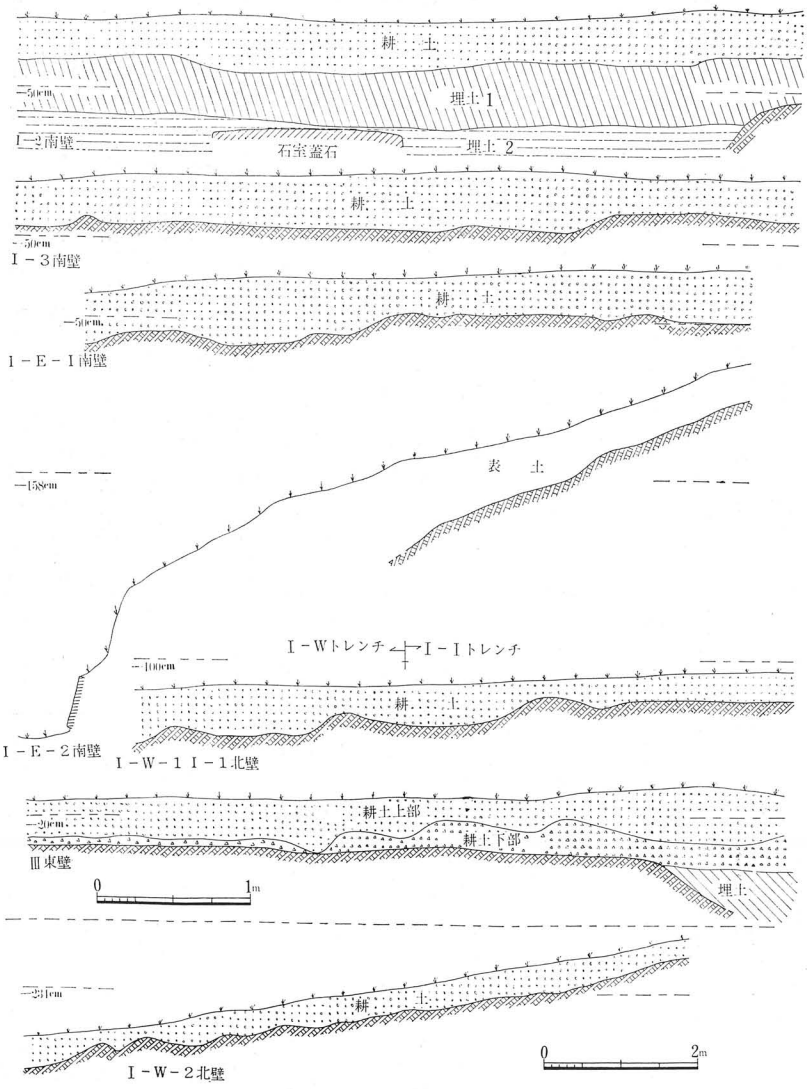
次に斜面の状態を見る。まず北側斜面はかなり急斜面をなすが、頂上から三・五〜五メートルのあたりに緩傾斜の部分があり、点々と頭ほどの石が認められるので、三・五〜四メートルのあたりが墳丘のすそにあたり、そのまわりに丁度縁のように平地がめぐっていたもののようである。次に東側では頂上から三メートルばかりの所にすそがあり、すそから外は広い平地となっている。件のすその所には一直線に石垣状に石を積み並べている状態が約一九メートルにわたって遺存する（図版第四および第3図）。その高さは、現在では一メートルに達しない低いもので はあるが五〇〜二〇センチの割石を用いた整然としたものである。元は今少し高く積まれていたのであろう。この列石についてやや疑問であることは、列石の方向は頂上面の長方形の東の辺と正しく平行しないことと、東南の隅角部のすそは列石の線を越えて東へはみ出していることである。列石の線が頂上面の一辺と平行しないのは墳丘築成に際し企画が精密でなかったためとも考えられる。隅角部がはみ出しているのは、この部分の切削整形工事が完了しなかったためか、あるいは後に何らかの事情で頂上部の土がこの所へ持ち出されたためかとも思われるが、発掘して土層を検べなかったので確実な判定はできない。

次に南の斜面について見ると、頂上から三・五メートル余り下ったところに高さ一・一メートルばかりの第一列石があり、その外方は縁（えん）のような平地をなしている（図版第五および第3図）。この第一列石は二〜三〇センチ程度の割石を多く用いている。この列石は、孟宗藪になっている西部では失われ、また東端部で崩れて散乱状態を呈している。第一列石から南へ約七・五〜八メートルをへだてて等高線六メートルから六・五メートルのあたりに第二列石がある。高さは約一メートルである。さらに第二列石の南方約三・五メートル、等高線八メートルのあたりに第三の列石がある（図版第六の上）。高さ一・二メートルほどのものである。

次に西側の斜面について見ると、頂上面の端から一一〜一三メートルのあたりに急斜面や、転石があって、このあたりに一つの段なり列石なりがあったかとも思われるが明らかでない。ところが、そのあたりからさらに西方一五〜一七メートルばかりのところ、等高線八・五メートルのあたりに、高さ元約一・二メートルばかりはあったと思われる列石が遺存する（図版第六の下）。

調査区分図や墓壙の実測図でも知られるように、墳丘の上面は、かなり広い範囲にわたり発掘をなし、また、列石の清掃その他墳丘斜面については、よほど注意して観察したけれども埴輪は一片も検出しなかったので、元来埴輪は使用していなかったものと考えて差支なかろう。

さて以上のような列石の配置からすると、はじめに述べたように、これら列石の範囲は少なくとも墓域としてこのように工事を施したはずであるから、東西は少なくとも五八メートルあり、北は急斜面のすその段のような所からを墓域とし、南は第三の列石までとすると約四四メート



第4図 墳丘土層実測図

ルの範囲ということになるのである。これだけの範囲を造山第三号墳の範囲とすると、南側については、第一列石の附近を除けば第二・第三の列石のあたりなど、自然の山丘に格別切削整形したとも見えない。西側斜面について見ると、まず頂上面に接する斜面は極めて緩傾斜であって、開墾のため頂上の土が西側へ推し出されたためであろうと想像されたが、この部分のⅠwトレンチを発掘して検討したところ、僅かな耕土の下は地山であって、古墳本来の斜面であることが判明した（図版第六および第4図）。また西側の列石のあたりを図によって見ても、それがほとんど自然の山丘の地形そのままであることが知られる。これらのことを総括していえば、この古墳は、上面は一応正しい長方形に加工し、墳丘上部については、北・東・南の三方は大体方形墳らしく切削し、西側も一応は稜線をもつように加工したであろうが、それぞれの面を同一傾斜をもつ整然とした方形の墳形を呈するところまでは工事を徹底させたものではないのである。なお墳丘について今一つ注意されることは、墓壙以外の頂上部では、耕作土層の下は地山であって、いわゆる盛った土として確認できるものは存しないことである。

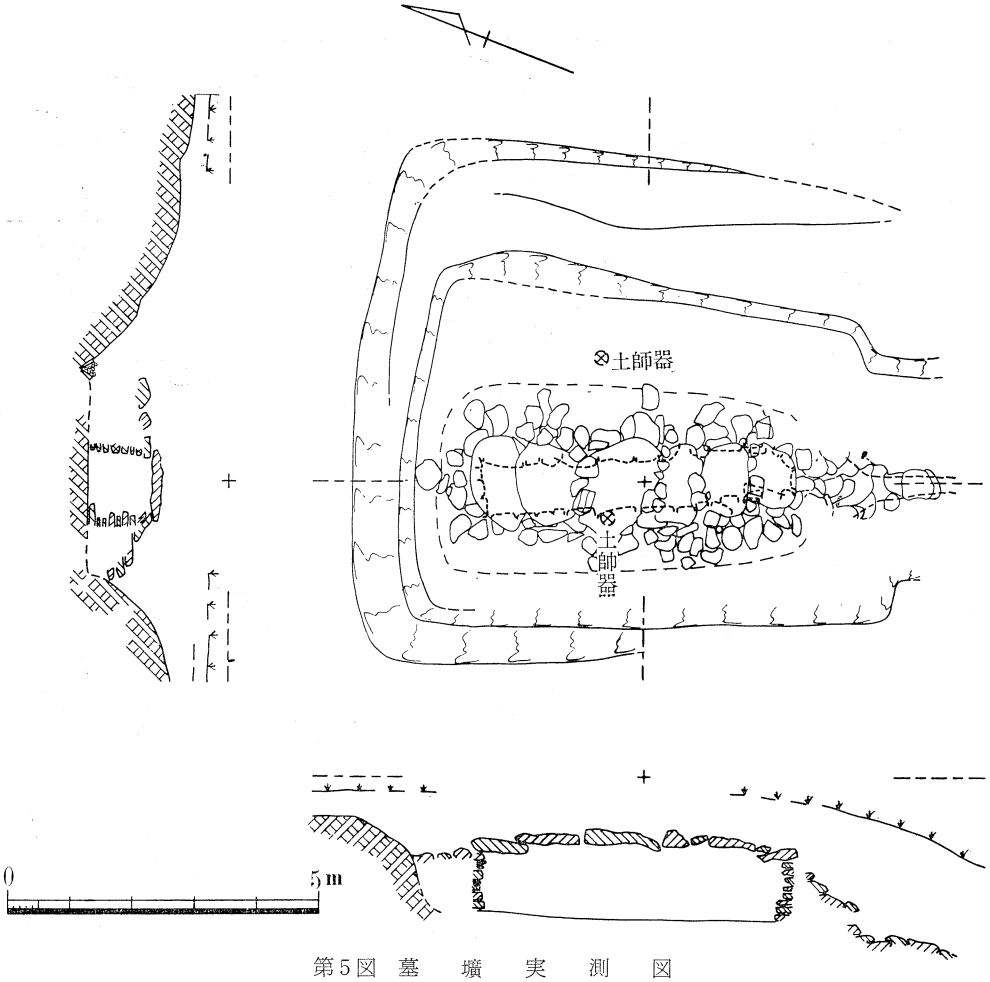
要するに造山三号墳の墳丘は、自然の丘陵の頂上を利用し、その頂上部を簡略に切削して一応長方形に加工したものであり、多くの労を費さず、また厳密な設計もなく築造したものといえる。しかしそれにもかかわらず、墓域としては少なくとも東西五八メートル、南北四四メートルという相当大きな古墳として築造したものである。否あるいはこの丘陵全体を墳丘に見立てたのかとさえも思われるのである。

五　内　部　構　造

主体構造は、扁平な割石を小口積みにした、長さ四・七五メートル、幅約一メートル、深さ約一メートルの細長い竪穴式石室一基である。

この石室を構築するために掘設した墓壙は、上縁の東西八・五メートル、南北九メートルのほぼ長方形であるが、石室の蓋石の上面ぐらいの深さのところで北・東・西の三方は段をなしており、ことに東はこの段が他の側よりも二・五メートルばかりも広くとられている（図版第九～一〇および第5図）。このようにして、蓋石上面の高さの所における墓壙の広さは、北端で約六メートル、南端で約四・五メートル、南北約七・五メートルであって、石室の蓋石の下面の高さから下は急傾斜で下降し、扣え積みの石の外側とほとんど接している。さきに述べたように、墳頂には耕土のほかには確実な盛り土と認め得るものはほとんどなく、その下は地山であるために、墓壙はすなわち地山を掘鑿したものであって、その形状を容易に確認し得る状態にあった。

石室は、墓壙の中央より西に偏して西壁に密接して構築されている（図版第八の下・第5）。蓋石は五枚の平な割石を長さ五・三メートルに



第5図　墓　壙　実　測　図

わたって並べたものであるが、頭の方と思われる北端から中央部にかけて大形の石を用い、足の方である南部は小形の石を用いている。石の大きさは、大形のものは幅一メートル、長さ一・九メートルばかりあり、小形のものは幅六〇センチ長さ一メートルばかりであって、厚さは一五～二〇センチ程度の扁平な石である。これら蓋石は黒色の石であるが、その表面は白色を呈しており、露出してころがっていた石を多く用いたものと思われる。さてこれらの蓋石と蓋石との接合部には小形の割石を置いて隙き間を塞いだ後、黄色の粘土を五～一〇センチの厚さで被覆する（第6図）。粘土の表面には丹を塗った形跡は全く認められない。なお粘土被覆について注意されたことは、蓋石の全面に及ばず、北端の蓋石の如きは、接合部以外は大部分粘土で覆われていなかったものもある（図版第八の上）。これは蓋石から地表まで比較的浅いため、後に開墾その他で損ぜられた部分もあり得るが、元来粘土被覆が比較的簡単なものであったためであろう。

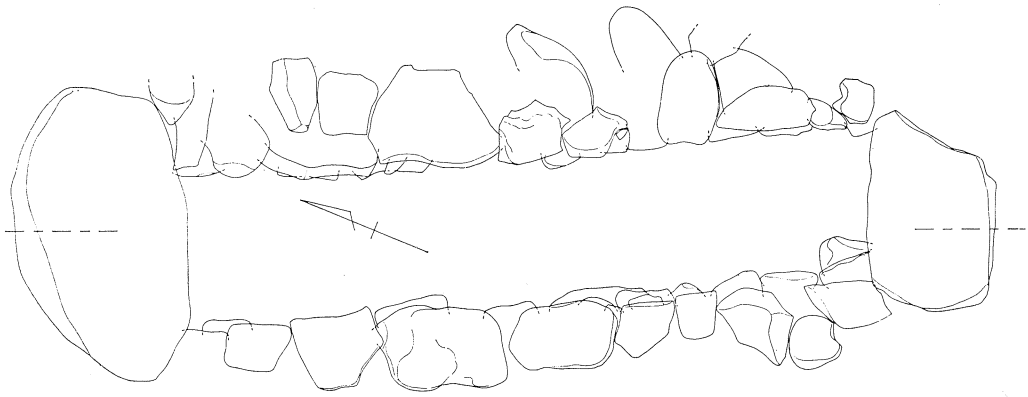
次に石室内部であるが、まずその空間の大き

0　　1m

第6図　石室蓋石粘土被覆状態実測図

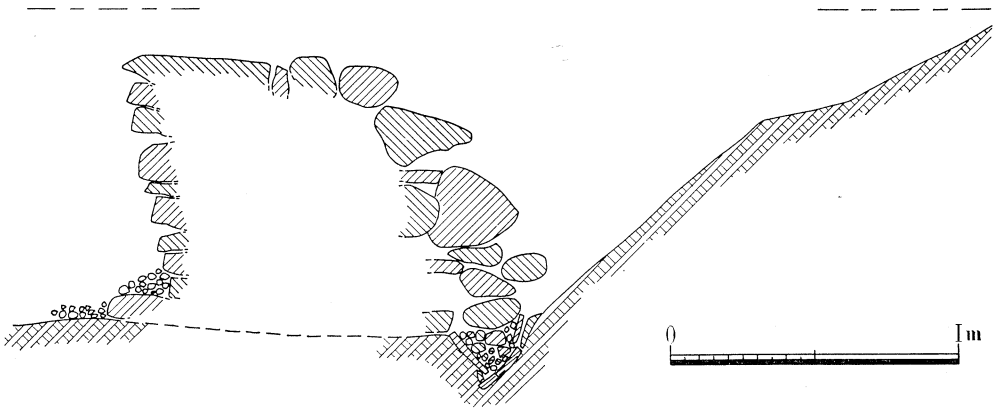
0　　1m

第7図　石　室　蓋　石　実　測　図



第8図　石　室　上　面　実　測　図

0　　1m

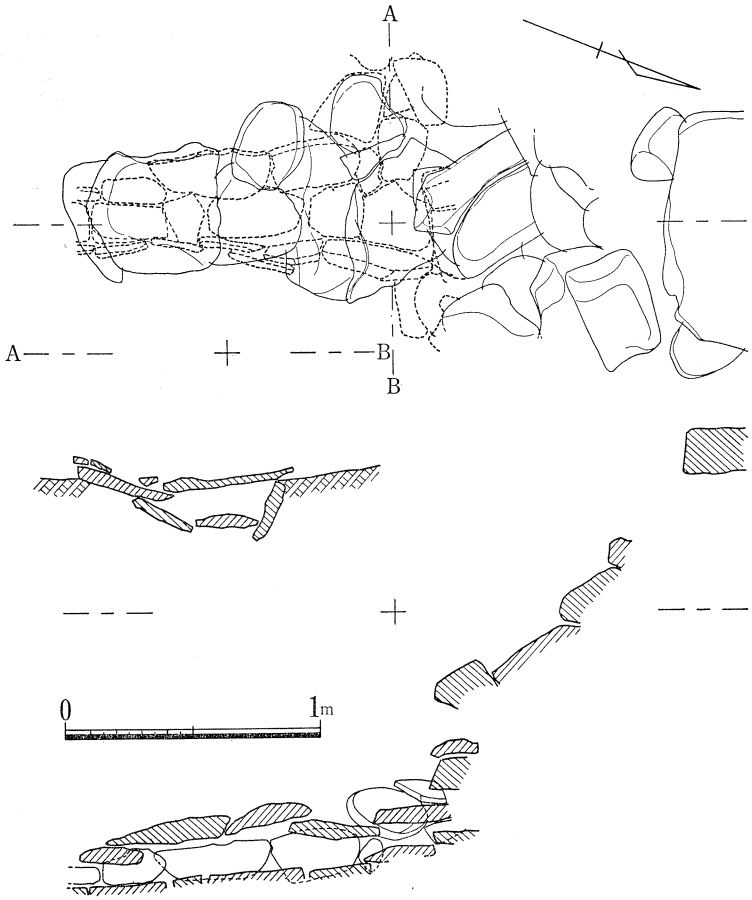


第９図　石室外部東側排水溝断面実測図

さは、縦すなわち南北の長さ四・七五メートル、幅は頭の方と思われる北部で一メートル、南部で九〇センチ、中央部で約九五センチあり、床から天井までの高さは北部で九〇センチ、南部で九〇センチ、中央部で約一メートルである（図版第一一）。地表から蓋石までの深さは約七〇センチあり、室の床面は地表から約二メートルばかりの位置にあたっている。室内について、とくに注意されるのは床面の構造である。床面が横断面においてU字形にくぼんでいるのは、いわゆる割竹形木棺を収容したと思われるこの種の竪穴式石室の通例に則るものであるが、特色のあるのは粘土床ではなく礫床であることである（図版第一二）。壁に沿うたところでは七～八センチ乃至一〇センチばかりの大形の川石を用い、中央部は二～三センチの小さな川砂利を用いている。礫の厚さは、側壁に接する所では二五センチ以上、中央で一〇センチばかりで、その下は地山を削った平面であって、側壁の割石はこの地山面から積み上げている。床の構造として第二に注意すべきは、細長い室底の両端から四〇センチのあたりと、中央部との三ケ所に、それぞれ側壁に接して長さ三〇～五〇センチ、厚さ一三～一五センチばかり、幅二五～二七センチほどのまるい川石を、それぞれ一対ずつ対称に配置していることである。おそらくまず割竹形の木棺を置く際に、これらによって棺を安定さす目的を以て配置したものと思われる。なお石室内の北端の壁から二〇センチの所に、壁と平行してほぼ中央に幅八センチ長さ約一五センチ高さ約一〇センチの粘土塊が礫床面に乗っており、同様に南壁から約三〇センチの所にも幅約一〇センチ、長さ三〇センチ、高さ八センチばかりの粘土塊が遺存した。床の構造として第三に注意されるのは、礫床の下に設けた排水溝である（図版第一五の上）。すなわち、室の中央を縦断して礫床下の地山面を掘り、小形の扁平な割石をV字形に並べたものである。幅約二五センチ、深さ約一五センチの溝である。それが礫床の下に設けられているのであるから、室内に侵入した水は礫を通って尽くこの排水溝に集約されるようになっている。なお礫床の北端と南端とでは南すなわち足の方が一〇センチ以上低くなっているので、溝に集ま

った水は南端に向かって流れ室外に導かれる仕組となっている。室の南端壁の下を通った溝は後に記すように南壁の扣積石の外へ出るところで、東壁と西壁の扣積石の外側の排水溝と合流して墳丘の南斜面の下を南側第一列石の下へと導かれている。

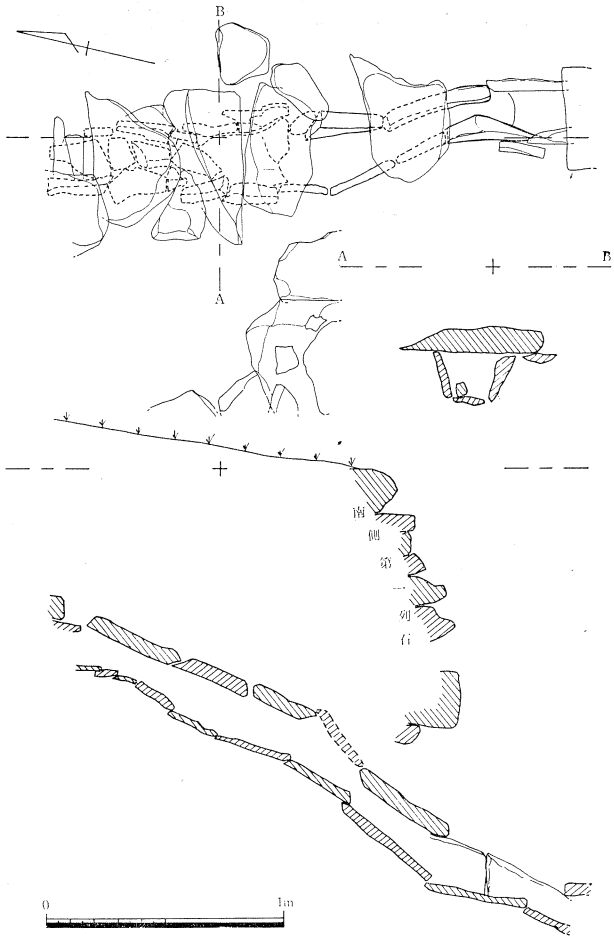
次に石室の壁石は、いわゆる扁平な割石の小口積の手法によるもので、この種の古式の竪穴式石室の通例にしたがうものである。個々の石材についてみると、幅は六〇センチ内外のものが多く、厚さは一〇～一三センチ程度のものが多いが、中には一五センチ程度の比較的厚いものも混じている。また広い方の面には、丸味を帯びた面をもつものもあり、川石・野石の類を割って用いたものも少なくないと思われる。それ故この種の石室としては、その積み上げた面はやや粗雑な感じを与えるのである。石と石とを積んだ空隙には黄色粘土を詰めたものであろう。それと思われるものが諸所に遺存する。次に室壁の形態に関し注意されることとして、隅角部を整然と直角に積まず、まる味をもたせて構築していることである。僅かにこうした傾向のものは、時に見られぬこともないようであるが、この石室の場合はその程度がやや極端なという印象を与える。



第10図　石室外部南側排水溝実測図

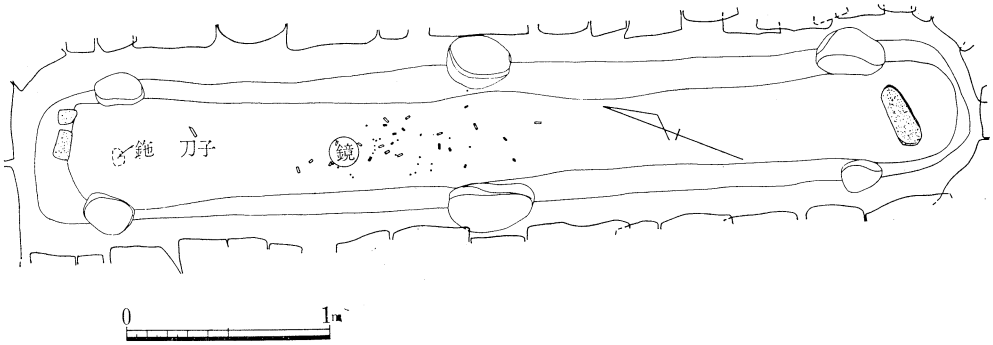
次に扣積であるが、東側を発掘して点検したところでは、室壁を構成する石の外側には扁平な割石のみならず比較的扁平な野石などもまぜて積み、扣積の外縁の下部は墓壙壁のすその近くまで及んでいる。東側の扣積は、石室の壁の内面から計って、上部で約一メートル、下部で一・三～一・四メートル

である。墓壙壁のすその所、扣積の外縁の底ぎわの所に石室の底と同様に、小形の扁平な割石を以て断面V字形の排水溝を設け、溝内には径三センチばかりのまるい礫を詰めている（図版第一五の中および第9図）。この溝は石室の底の溝よりやや低い位置にある。すなわち石室壁石の下の地山面は室外の排水溝の方へ僅かに傾斜した面をもつように削りその上に扣積をしたものであり、扣積を伝うた水もことごとく室外の排水溝に集結できるように構築したものである。このような墓壙壁のすその排水溝は東西両側にあって南方へ走り、それは室の南側の扣積の外縁の中央で、前に記したように石室中央を縦貫した排水溝と合流するのである（図版第一五の下および10図）。三者合流した溝は扁平な割石で構成した蓋のある暗渠（断面逆梯形）となり、南側斜面の地下を降下し、南側の第一列石の下を潜り、さらに下方へと通じている。この暗渠は、合流点では蓋裏の幅約五〇センチ、深さ一五センチであるが、第一列石のあたりでは蓋裏の幅二〇センチ、底面の幅一五センチ、深さ一五センチばかりである（図版第一六および第11図）。



第11図　南側第１列石附近の排水溝実測図

さてこの石室が、墳丘上において占める位置は、墳丘頂上面の東西のほぼ中央に位しているが、頂上面の南辺と北辺との関係からいうと極端に南に片寄っている。そのため頂上面の北半部にも何等かの主体構造があるのではないかと疑われたが、発掘して検討したところ、そうした構造の存しないことは、さきに述べた通りである。このように南に偏在するのは奇異の感をいだかせるが、南側の第一列石の所を三・五メートルの等高線が通っており、北側の三・五メートルのあたりは、そこまでは急斜面で、そのあたりから段の面のような緩斜面の姿をとりあたかもそこが墳丘のすそのように造られていることに注意し、



第12図　石室内遺物出土状態

（ここにも列石が埋没しているかもしれない）。仮りに南北両斜面で三・五メートルの等高線を押え、その中点を求めると、それはほぼ石室の中心に近い位置にあたっていることになる。それ故この古墳の築成にあたっては、このような意味で墳丘の中央に石室を構築する意図であったことが推測される。あるいは、南側にはさらに土盛りをして墳形を完成するつもりであったかもしれない。（この部分の封土が流失したことも考られぬでもないが、それならば列石などはもっと埋没しているはずである）。

六　遺　物

発見された遺物の品目をあげると次の通りである。

墓壙内の埋土の上部から検出されたもの

土師器片

器台破片

小形壺破片（二種）

低脚式高坏破片　二

石室内部から検出されたもの

土師器片

器台破片

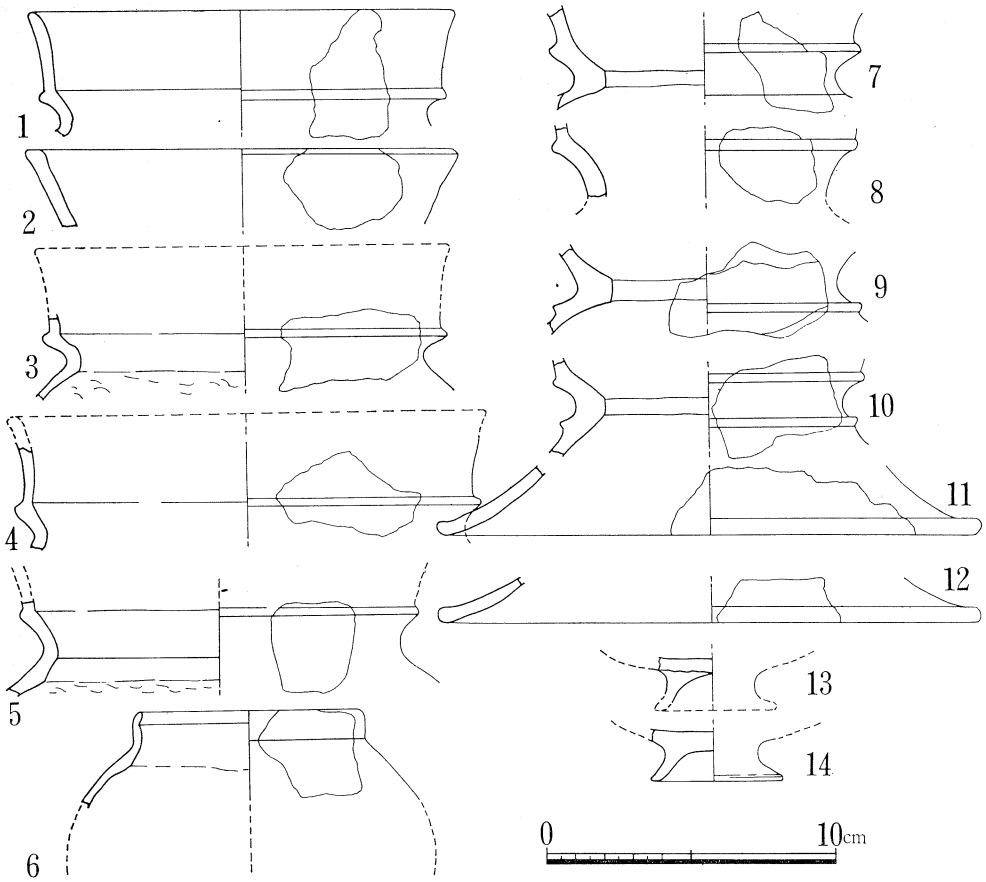
小形壺破片

三角縁二神二獣鏡　一

玉　類

碧玉製管玉　三〇

（内　太形二二　細形八）



第13図　土　師　器　型　式　図

ガラス製小玉　三三

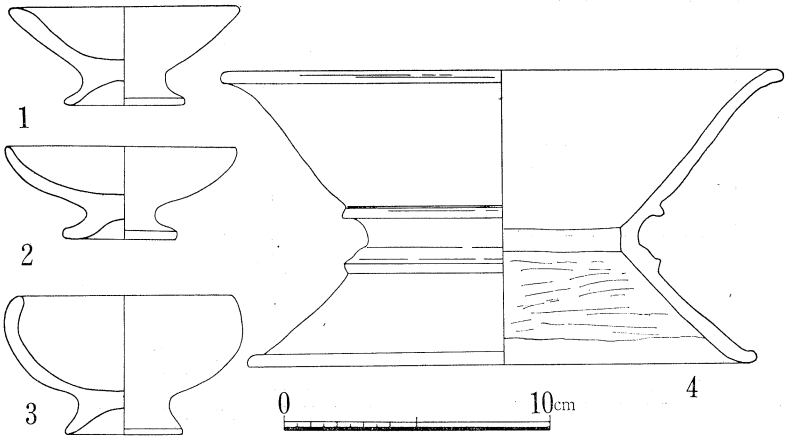
鉄器類

刀子　一

鉋（やりがんな）　一

まず土師器であるが、図版第一七に示したのは器形や部分の大体弁別できるものを選んだのであって、石室の内外から検出されたものの総量は写真に示したものの十倍ぐらいはあるが、細片かまたは壺の胴部などである。まずその出土位置からいうと、石室外で発見されたのは、石室の蓋石列の中央部の上の埋め土の直経約二メートルばかりの範囲と、その東方、蓋石の中央から二メートル離れた地点の径二〇センチばかりの所とであった（第5図）。深さは、蓋石の上方では地表下五〇センチ内外で、中には蓋石をやや外れた所では蓋石の下面に近い位置のものもすこしはあった。東の方に離れて検出された破片群は地表下五〇～七〇センチの位置から検出された。次に石室内から小破片が検出されたのは、やや奇異の感を与えるけれども、石室内には所によっては一〇センチ以上も埋土が流入しており、それに土器片が混じた状態で発見されたので、石室外の墓壙の埋め土に混じていたものが陥入したものと判断

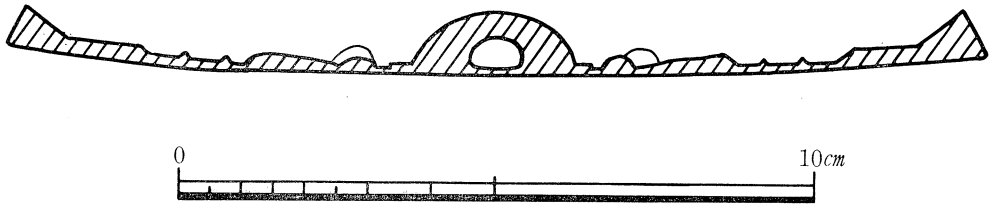
された。蓋石の粘土の被覆は簡単であり、欠如する部分も少なくない状態であったから、空隙から漏れて陥入する可能性は十分あったと思われる。（木の根に押されたり、果樹を植えたりした場合あり得ると思われる）。それ故これらの土師器はもとはすべて埋め土に混じていたものとして一括して取り扱ってよいと思う。形式や質の上でも全く区別し得ないものである。これら土師器片は、胎土はいわゆるこし土ではないが大形の砂粒は含まず、薄手で明るい赤褐色を呈し、すこぶる脆くなっていて破片の接合はほとんど望めない。それ故個体数を推定することは困難である。僅かに既知の類品によって全形を推測するほかはない（第13図）。



第14図　土師器参考図（1鍵尾　2大成　3松本1号　4小谷）

まず器台について見るに、上下の中央にくびれがあり、その上下に突帯状の稜線をめぐらし、そこから上と下と双方へ外反しながら長く口縁と脚とがのびてあたかも断面が5の字形の口縁（いわゆる二重口縁あるいは複合口縁）をもつ古式の壺形土器の口縁のような具合になっているもの――文字通りの鼓形器台――である。この種のものは山陰地方の古式土師器ではもっとも多く見られる品であり、古墳出土例では島根県三刀屋町松本一号墳（注12）にもその例のあるものである。この種器台の源流は、山陰の弥生式土器の終末期に比定できる安来市九重（くのう）土壙墓出土の九重式土器（注13）に見られ、定形化したものは同市鍵尾土壙墓で多数検出され、古式土師器の期間に盛行するものである（注14）（第13図7～12）。なお第14図参照）。小形壺は二種の器形が認められる。すなわちその一つは、いわゆる5の字形口縁をもつ式のもので、口径一〇センチ余りの品で、底部は確認できないが、このような小形品は早くから丸底化するので、これも丸底と考えられる。肩部に施文があるかどうかはいたみが甚しいので不明である（第13図1～5）。第二の壺は一センチもない短かい頸がやや内傾するものであって、極めて薄手であることが注意される。（第13図6）

低脚式高坏と仮称したものは、径三・五～四センチ内外の小さく低い脚をもつもので、坏部はやや深く口縁が内湾する式のものと、坏部の浅いものとあり、後者に甚だ浅くかつ口縁は直線状に大きく開き、むしろ蓋と思われるような品もある。この種のものは、山陰の古式土師器の初期と考える安来市鍵尾の土壙墓群にすでに出土例が認められ、古墳出土例では安

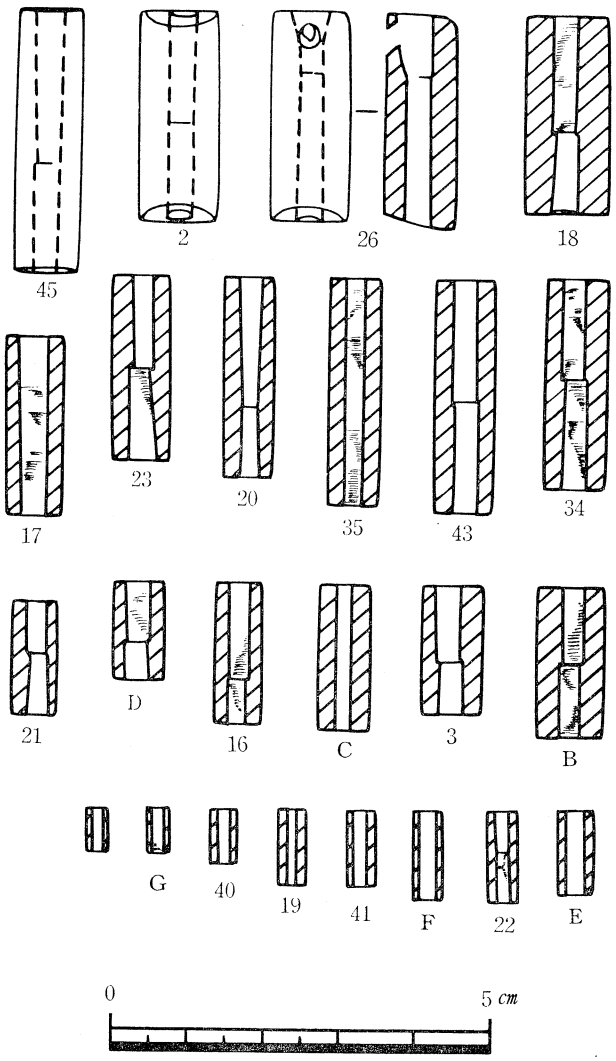


第15図　鏡　断　面　実　測　図

来市荒島町大成古墳・飯石郡三刀屋町松本一号墳などいずれも前期型の古墳からの出土品がある（注15）（第13図13・14。なお第14図参照）。

以上述べた土師器は細片であるので、その時期等について細かな判定は困難である。しかし須恵器出現以前の古式土師器としての特徴は明瞭である。

鏡は舶載品であって（図版第一七および第15図）、いわゆる半肉彫式神獣鏡に属し、鏡面の直径一五・四センチ、背面径一四・五センチ、縁は高さ七ミリの三角縁であって、鏡面の反り四～五ミリ、点々と銹化してうけた部分もあり、広く割れ目も生じてはいるが、全体がかなり暗黒色を帯び、文様は鮮明である。鏡面も大半は光沢を保っている。



第16図　管　玉　実　測　図

型式	図版第19の写真中の位置	採取番号	直径 mm	長さ mm
太形	上段左より 1	18	11.2	26.7
	2	4	9.8	24.8
	3	26	9.8	28.8
	4	2	9.0	27.5
	5	3	8.3	17.5
	6	6	7.9	14.5
	7	番外b	9.1	20.0
	中段左より 1	番外a	8.2	22.5
	2	34	8.2	28.5
	3	23	8.0	25.0
	4	46	7.0	27.7
	5	35	6.8	30.0
	6	43	7.8	31.5
	7	45	8.8	35.2
	下段左より 1	20	7.1	27.7
	2	44	8.3	25.5
	3	17	7.5	
	4	番外c	7.0	20.1
	5	38	7.4	折損(19.5)
	6	16	6.3	19.6
	7	番外d	6.8	13.7
	8	21	6.0	15.0
細形	左より 1	22	4.0	12.0
	2	番外f	4.5	12.0
	3	番外e	4.8	11.2
	4	19	3.5	10.2
	5	41	4.0	10.0
	6	40	3.9	6.7
	7	番外g	3.0	5.9
	8	番外	3.0	5.9

管玉計測表

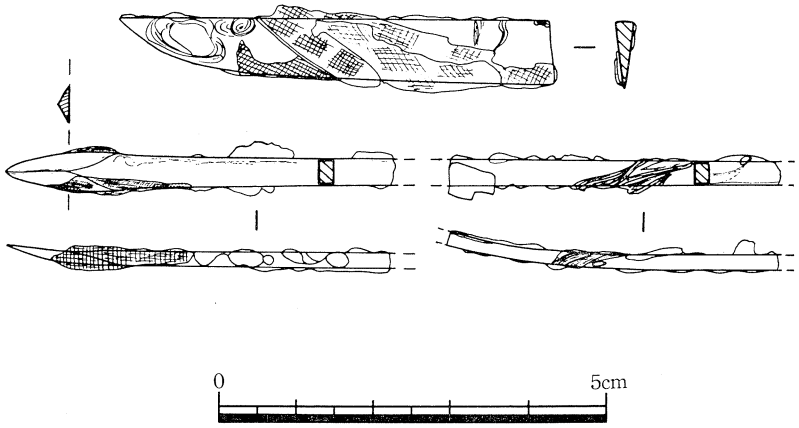
三角縁の内に外向鋸歯文、複線波文、外向鋸歯文を配し、そこから内は一段低くて櫛歯文帯をめぐらした内に銘帯をめぐらす。内区には円座をもつ頭のまるい乳を四個配し、各乳の間に獣形を一躰ずつと、羽翼をもち冠をつけた人物二体ずつとを配したものである（図版第一八）。鈕は径二六ミリ高さ八ミリあって円座をもつ。内区の文様は半肉彫り式に表出され、人物の顔面は横向き前向き、斜横向き等変化のあるかなり柔軟な表現をとっている。鏡の大きさ、文様および表出の手法等、早くから紹介された朝鮮大同江面梧野里煉瓦土取場発見の鏡（注16）によく似たもので、ただ人物の顔の向きなど僅かな相違がある。また大和佐味田宝塚（注17）、河内津堂城山古墳（注18）、摂津岡本ヘボソ塚（注19）、遠江庚申塚（注20）等の出土鏡に類するものである。銘文は左まわりに、

吾作明竟自有紀令人長□宜孫子作吏高遷車生炎耳宜气（命カ）（孚カ）

とある。この鏡は、石室中央よりやや北寄り石室北端の壁から一・五四メートルの所に、礫床面から僅かに浮いて遺存した。すなわち鏡の南の端は床より二・三センチほど浮き、北の端は床から一一センチばかり高い位置を占めて僅かに傾斜していた。

玉類のうち碧玉製管玉は合計三〇個あるがそのうちの二二個は太形である（図版第一九および第16図）。色は淡青色といった方が近い。磨研は全面極めて良好で光沢がある。孔はすべて両端から穿ったもので、両端における大きさに余り相違がなく、また両端から穿った孔が中央部でかすかなきわを残したものもあるが、ほとんどきわが見えなくなるまでに研かれている。また孔の内面にわずかな廻転の痕跡をとどめるものもある。二二個を太形としたけれども、実は極端な大形品ではなく、計測表に数値を示したように、もっとも太いもので径一一・二ミリであり、

また細いものは六ミリである。長さはもっとも長いもので三五・二ミリであり小形のものは一三・七ミリのものもある。この種の玉のうちの一つには端に近い側面から斜に一孔を穿ったものがある。次に八個ある細形の方は太形のものよりも一般にやや色が濃い（図版第一九の下）。太さは最大のもので四・八ミリ、もっとも細いものは三・五ミリであり、長さはもっとも長いものが一二ミリ、短いものは五・五ミリである。いずれも両端から穿孔している。管玉はすべて古式古墳に通有の特徴を示すものである。ガラス小玉は、直径四ミリ内外、高さ三・五ミリ内外のものが多いが、中には四ミリ程度のものもある。色は淡青色であり、かなり多くの気泡が認められる（第16図の下）。やはりその色合など古式古墳に多いものに属する。玉類の遺存した位置は、鏡の中心から北へ二二センチばかりの所から、鏡の南約一メートルの間、すなわち南北一・二一メートルの範囲で散乱していたのであるが、鏡の南二〜三〇センチのあたりにもっとも多く集まっていた。それは石室の中での位置からして、遺骸の頭部の置かれていた位置の附近と考えられる所である。



第17図　鉄　器　実　測　図

鉄器のうち、刀子は関の所から先端までのもので茎の部分を欠く（図版第二〇および第17図）。長さ五・二センチ、幅約九ミリ、厚さ四ミリほどの小形品である。柄の部分のないのは発掘の際に散佚したことも考えられるけれども、附着している布の形は関の所の切断面を覆うような形になっているので、副葬したときすでに柄のないものであったことが知られる。布は斜めにあててぐるぐると巻いた形でいく重かに厚くまたかなり広く附着している。布は平織で、経（たていと）は一センチにつき約一六本、緯（よこいと）は一センチにつき約二〇本ほどの割で通っている。この刀子は石室の北壁から一メートルばかり、床の中央よりやや東寄りの位置に遺存した。

鉇は極めて細形のもので、欠損部があって正しい長さは不明であるが、現存部長さ九・五センチあり、先端は蛇頭形で、その広い部分の幅約六ミリである。柄の部分は幅約四ミリ厚さ約三ミリあり断面は長方形である。先端部には約四ミリほどの反りがる。先端部の断面は低い三角形に近い形である。この鉇にも布が附着している。やはり平織でその構成は経一センチにつき約一六本、緯は一センチにつき約二〇本ばかりである。これら鉄器のうち刀子は石室北壁か

ら一メートルばかり、鉋も刀子の附近から発見された。

七　結　　語

以上述べたように、造山第三号墳の発掘調査により、その墳形・墳丘の修飾および墳丘の土層構成等の概要、内部構造の細部、主体内部の副葬品、主体附近の遺物等について明らかにすることができた。すなわち墳形は方墳の系統に属し、その頂上面は長方形を呈し、埴輪を認めず、斜面または墳丘のすそと思われる位置に一段乃至三段の石垣状の列石を設けたものであるが、墳丘を営造するに際し自然丘に対する加工は簡略であって、四方をそれぞれ正しく対称の形をとるまでに徹底せしめず、また墳頂には盛り土を施したか否か明瞭でなく、初めには盛り土を施したものであったとしても極めて少ないものであったと思われる。内部構造は、やや長方形の墓壙を深く地山に穿ち、壙内に扁平な割石を小口積にした細長い竪穴式石室を一基構築したものであるが、石室は粘土床をもたず、礫床を用いたこの種石室としては他地方には例の少ない手法を以てし、さらに室の内外には入念な排水溝の構造を備えていることが注意せられる。石室の上方から土師器が検出されたことは古式古墳に間々例のあることであるが、細片ながらある程度形式を判別し得たことは幸であった。副葬品としては、舶載の三角縁神獣鏡一面は優秀な品であるが、碧玉管玉三〇個、ガラス小玉三三のほかは、小鉄器僅かに二個であって、墳丘並びに主体構造の規模と対照して副葬品が僅少であることが注意される。

さて以上のように、この調査によって判明した事実に関連する若干の問題について触れておくこととしたい。まず第一に墳形が方墳の系統に属する点であるが、さきに述べたように、造山古墳群三基のうち第一号墳は大形の方墳であり、第三号墳と同様竪穴式石室をもち、全国的にも方墳中の古い様相のものとして注意されるものであるが、第二号墳は前方後方墳であって、やはり方墳と密接な関連のある墳形と見られるものであり、三基とも方形の系統に属することが注意される。昭和二六年のころには出雲国内に方墳は三二基検出されていて（注21）、出雲にのみこのように多数集中している点が注意されたのであったが、現在では大少合わせると一〇〇基ばかり判明しており、積極的に調査するならばそれに数倍する方墳がこの地方にあることが判明するものと予測される。これら方墳のうち内容の判明しているものは、二七基ほどあり、それらの知見からすると、多くの方墳は古墳時代前期、中期に属するものであって、後期初頭のものが若干あり、後期中葉以降のものはむしろ稀である。（なお九〇基のうち、近年工事等で壊滅したものは二四基におよんでいる。）このように県下、とくに出雲地方の古墳文化に特色を与えている

方形墳の中で、造山三号墳は比較的大形に属し、また時期的には後説の通りそれらの中でも古い時期に属していると考うべきものであることは、この発掘調査により地方古文化の解明に益することを期待されたことに対し副うところがあったといえる。墳丘について注意される第二の点すなわち石垣状の列石であるが、この種の構造は諸所にその例のあるものとされているが、この附近ではこの種の設備をもつものが多く判明しており、この地域の常習となっていたかとも考えられる。すなわち造山古墳群では第一号・第二号ともにそうであり、同じ荒島町の仏山古墳、それと余り遠くない西赤江町の宮山古墳（旧称「神塚古墳」）にも認められる。さてこのような石垣状の列石は、岡山市都月二号（注22）墓のような「弥生式時代終末期」とされている方形の墳墓に見られるものとの間に系統上の関連を考えざるを得ない。それは墳形に関しても同様であろう。なお石垣状列石の性格、すなわちそれを設けた主な目的であるが、斎藤忠氏（注23）は「外護列石」の名を用い「埴輪円筒列の代りとか、あるいは埴輪円筒列との時間的推移によったものとかではなく、埴輪円筒列とは無関係に、封土を保護する施設として特殊な存在をなしたものとすべきであろう。」とされているが、この地方の実際について見ると、それが設けられているのは墳丘のすそといっても、地山を切削形成したすそであって、必ずしも外護を必要としない位置に多く見られる。造山一号墳も、その位置から考えてそれと推察され、発掘によって確認された西赤江町の宮山古墳（注24）はその明瞭な例であり、さらに墳丘の断面が露呈されている荒島町の仏山古墳もそうである。ことにこの造山三号墳では、ほとんど自然丘の形そのままと思われる南側の第二、三列石の場合がそうである。このような実状からすると、墓域を区画し、また墓域を飾ることに主な目的をもつものと考えられる。もちろん本来の意義が失なわれ習慣的に設けられる場合も考えられるが、この種列石と岡山市都月二号墓のような「弥生式」時代のものとの間に系統上の関連があるとすれば、同墳にも相似た列石があるが、同墳は盛り土はあるとしても、小形のこの種の墳墓に必ずしも実用的意図をもって列石を配したとも考え難いから、この種列石の性格は本来実用的というよりも、むしろ精神的な意味をもっていたとすべきであろう。造山三号墳の場合は必ずしも本来的な意味を失ったものではなかろう。

次に内部構造の問題であるが、細長い竪穴式石室として、大体の特徴は前期型古墳に見られる石室の通例に則るけれども、床面が礫で構成されている点が異っている。ところで、山陰における竪穴式石室の類をあげるとおよそ次のようなものがある。

安来市荒島町造山一号墳
〃　〃　大成古墳
鳥取県東伯郡羽合町橋津馬ノ山四号墳
出雲市東林木町大寺古墳

鳥取県西伯郡淀江町福岡上の山古墳
松江市竹矢町上竹矢丘陵上の一古墳
〃　西川津町金崎一号墳

これらのうち上の山古墳(注25)は約三〇メートルの帆立貝式とも見られる墳丘をもち、楯・家形等の埴輪を出しており、大小二個の石室があるが、その大形の方は長さ四・一メートル、幅八〇～六五センチでやや小形に属し、遺物も仿製小形内行花文鏡、赤めのう勾玉、蠟石製勾玉小玉等を出しており、中期的様相の古墳である。上竹矢の古墳も壁は扁平割石小口積であるが小墳であり室も小形であって副葬品はない。金崎一号墳は前方後方墳で石室は長さ四メートル、幅約一メートルのものであるが、底面は平で礫をしき、副葬品にはめのう勾玉やことに古式須恵器があって、中期末ごろと考えられるものである。大寺古墳は、丘上の前方後円で古式の様相を示すが、石室は長さ約四メートル、幅約八〇センチあり、粘土床であるがやや小形の石室である。そこでこれら上の山、上竹矢、金崎、大寺を除き、大形で古い様相の古墳としては、造山一号墳・大成古墳・馬ノ山四号墳が注意される。

まず造山一号墳は大形の方墳で、第一号石室は長さ七メートル、幅一メートル、高さ一メートルのものであって、その床面はU字型に凹む礫床であり、床面の下に排水構造があり、その端は墳丘斜面に至っていることが知られていて、造山三号墳と極めてよく似た構造であることが注意される(図版第二一の上)。次に大成古墳もやはり方墳で、造山一号とよく似た石室と思われ(注26)その床面は梅原博士の示された図によって見るとやはり礫床と思われる。U字状にくぼむか否か指摘されていないけれども恐らく造山一号と同様のものと思われる。馬ノ山四号墳(注27)は典型的な前期型の大形前方後円墳(全長八八メートル)であって、主体は後円部に竪穴式石室と箱式棺が並存する。その竪穴式石室(図版第二一の下)は長さ約八メートル、幅約一メートル高さ約一メートルあり、その壁の構成といい、堂々たる典型的なものである。その床はやはり礫床である。このように見て来ると、山陰の典型的な古式の竪穴式石室は、造山一号、大成・馬ノ山四号、そして造山三号といずれも礫床構造であることが強く興味をひくものである。畿内を中心として分布するこの種石室はほとんど粘土床に統一されているのに対し、他の点では畿内のこの種石室と同様の特徴を備えながら、山陰のこの種石室が床面に関してはこのように共通した礫床であることは注意すべきことと思われる。これらとは異なり中期様相のものながら近年明かにされた岡山県総社市随庵古墳(注28)などのような礫床との間の系統的関連もないとはいえないのかもしれない。棺床を固定するための大形の石を数個配置する手法にも類似が見られる。竪穴式石室ではないが、岡山県の月ノ輪古墳(注29)などのように、粘土廓の礫床との関連も問題になると思われる。割竹形木棺を収容したと思われる竪穴式石室の床面を礫床とするこ

とは、粘土床から二次的に生じた惰落形式であるのか否かは簡単に即断できない問題であろう。いずれにしても山陰地方に多いことは注意すべきである。それは排水構造の形式とも関連して考察さるべき課題であろう。

最後に造山三号墳の年代観について触れねばならないが、個々の遺物なり遺物の組合わせという点からすれば一応前期古墳として矛盾はないであろう。ただ造山一号墳と比較するならば、その位置の関係や石室がやや粗造であること、やや小形であることなどから漠然とではあるが一号墳より後に造られたという印象を与える。その一号墳の年代的位置について、例えば斎藤忠氏『日本古墳の研究』附録の「古墳編年表」では四世紀末のあたりに記載されており、河出書房『日本の考古学Ⅳ』の大塚初重氏の「古墳の変遷」では「前Ⅱ期」として取り扱われ、同書の「古墳文化の地域的特色」中の池田満雄氏等の「山陰」のところに掲げた「山陰古墳編年表」では四世紀中ごろのあたりに造山と大成とが記されている。これらは、いずれも編年の具体的根拠が一々示されていないので、そのまま基準として利用することが躊躇される。造山一号墳では一室から仿製かとされている鋸歯文帯縁の方格規矩鏡と仿製三神三獣々帯鏡が出ており、一室からは舶載と見得る鋸歯文帯縁の方格規矩鏡と碧玉製紡錘車などが出ている。小林行雄氏の提示された(注30)、鏡式の組み合わせ、仿製鏡における三角縁神獣鏡と後漢鏡を模したものとの前後観、碧玉製の腕輪等の石製品を伴うものの時期観等を考慮されているかとも思われるが、なお検討すべき課題を多く残しているように思われ、さらに別な原理によって年代観が確立される必要があるように考えられる。大成古墳では舶載の三角縁二神二獣鏡と鉄剣・鉄製素環頭大刀等を出しているが、遺物は多くはなく、これらは必ずしも右のような原理によって位置づけ得ないのではなかろうか。大成古墳では土師器の完形品も出土しているが、造山一号墳では土器の形式を推察し得る円筒棺とも思われる品が検出されている。末期の弥生式土器および古式土師器に関する正確な編年は不十分であり、また諸地域間における諸形式の時期的平行関係も十分明らかにされていないので、土師器によって古墳の編年を裏付けることは今直ちに可能とはいえない。

しかし近時われわれの行った調査では、古式古墳から埋葬に関連すると思われる土師器が検出されるのは決して稀な例ではないから、この方面から編年を裏づけることは大いに期待がもてることであり、また努力すべきであろう。造山三号墳でも埋葬に関するものと考えられる土師器が検出されたが、細片であって、直ちにこれを以て年代を論ずるには足りないけれども将来においては何程か役立つことも期待できるであろう。

注

1　島根県教育委員会『島根の文化財』第三集（昭和三八年）。森貞成「出雲国能義郡荒島村出土の遺物について」（考古学雑誌二九の一二（昭和一四年））。山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」（島根大学論集　一（昭和二六年））

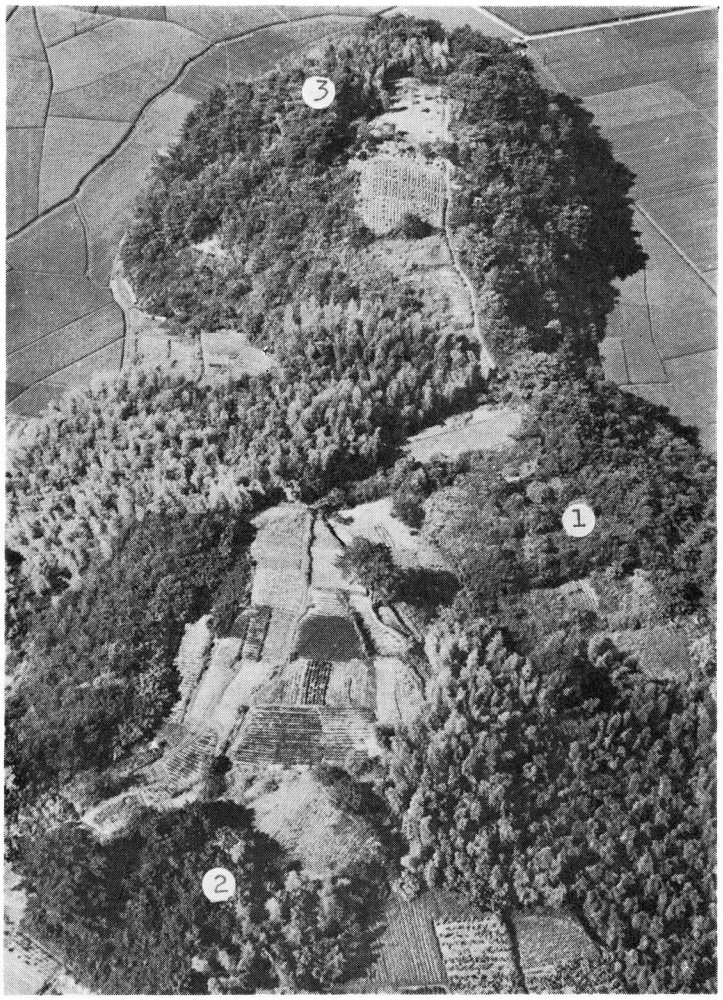
2　梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」（考古学雑誌九の一（大正七年））

3 梅原末治「出雲国に於ける特殊古墳　中ノ下」（考古学雑誌一一の三（大正一〇年））
4 右に同じ
5 駒井和愛・山本清「安来市宮山古墳の発掘」（平凡社『出雲・隠岐』（昭和三八年））
6 3に同じ。島根の文化財第三集。
7 山本清「西山陰の横穴について」（島根大学論集八（昭和三三年））
8 直良信夫『近畿古代文化叢考』所収「山陰道発見の甕棺」
9 山本清「横穴の形式と時期について」（島根大学論集一一（昭和三七））
10 山本清「島根県安来市鍵尾の土壙群とその土師器」（日本考古学協会第二九回総会研究発表要旨（昭和三八年））。同「山陰の土師器」（島根大学山陰文化研究紀要六（昭和四〇年））
11 近藤正他「島根県安来平野における土壙墓」（上代文化三六輯（昭和四一年））
12 島根県教育委員会『松本古墳調査報告』（昭和三八年）
13 近藤正他「島根県安来平野における土壙墓」
14 山本清「山陰の土師器（島根大学山陰文化研究紀要六（昭和四〇年））。なおこの式の器台は畿内にも見られるが山陰のように盛行するものではないようである。関東の五領遺跡からも類品が検出されていることは注意すべきであろう。
15 右に同じ
16 梅原末治「北朝鮮発見の古鏡」（同『鑑鏡の研究』所収）の写真による。
17 富岡謙蔵『古鏡の研究』図版による。
18 仝
19 仝
20 後藤守一『古鏡聚英』の写真による。
21 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」
22 河出書房『日本の考古学Ⅲ弥生時代』の中の鎌木義昌「祭紀と信仰」および同書所載の写真、同じく『日本の考古学Ⅴ古墳時代下』の中の近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」による。
23 斎藤忠『日本古墳の研究』七三ページ七四ページ。
24 駒井・山本「安来市宮山古墳の発掘」
25 佐々木古代文化研究室『福岡古墳群』（昭和三九年）
26 梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」
27 佐々木古代文化研究室『馬山古墳群』（昭和三七年）
28 鎌木義昌『総社市随庵古墳』（昭和四〇年）
29 近藤義郎編『月の輪古墳』（昭和三五年）
30 小林行雄『古墳時代の研究』第五章「前期古墳にあらわれた文化の二相」

造山遠望（左頂上第一号墳、中央頂上第二号墳、右端頂上第三号墳）

造山第三号墳全景（東方の第一号墳頂上から見る）

図版第二　空中から見た造山



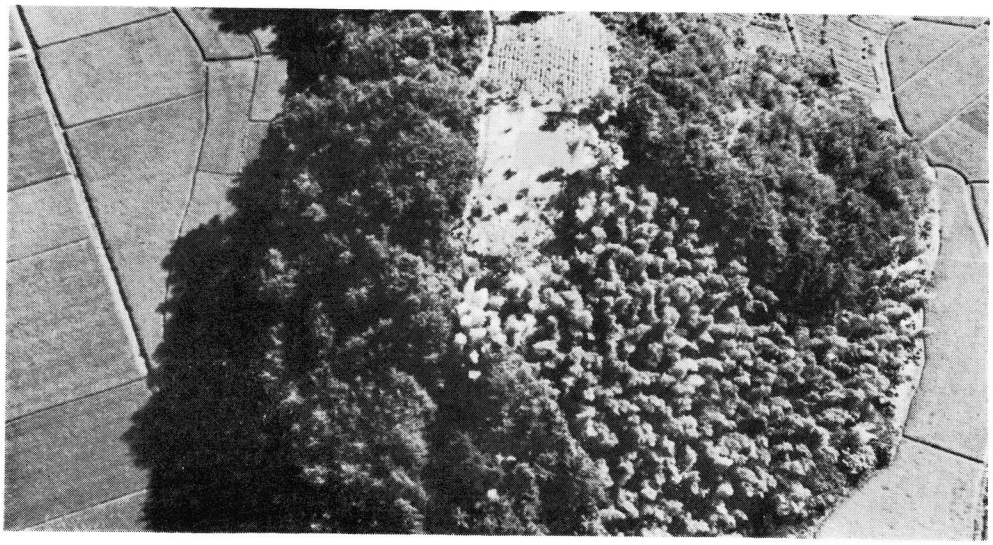
←第三号墳

造山古墳群（東方から見る）

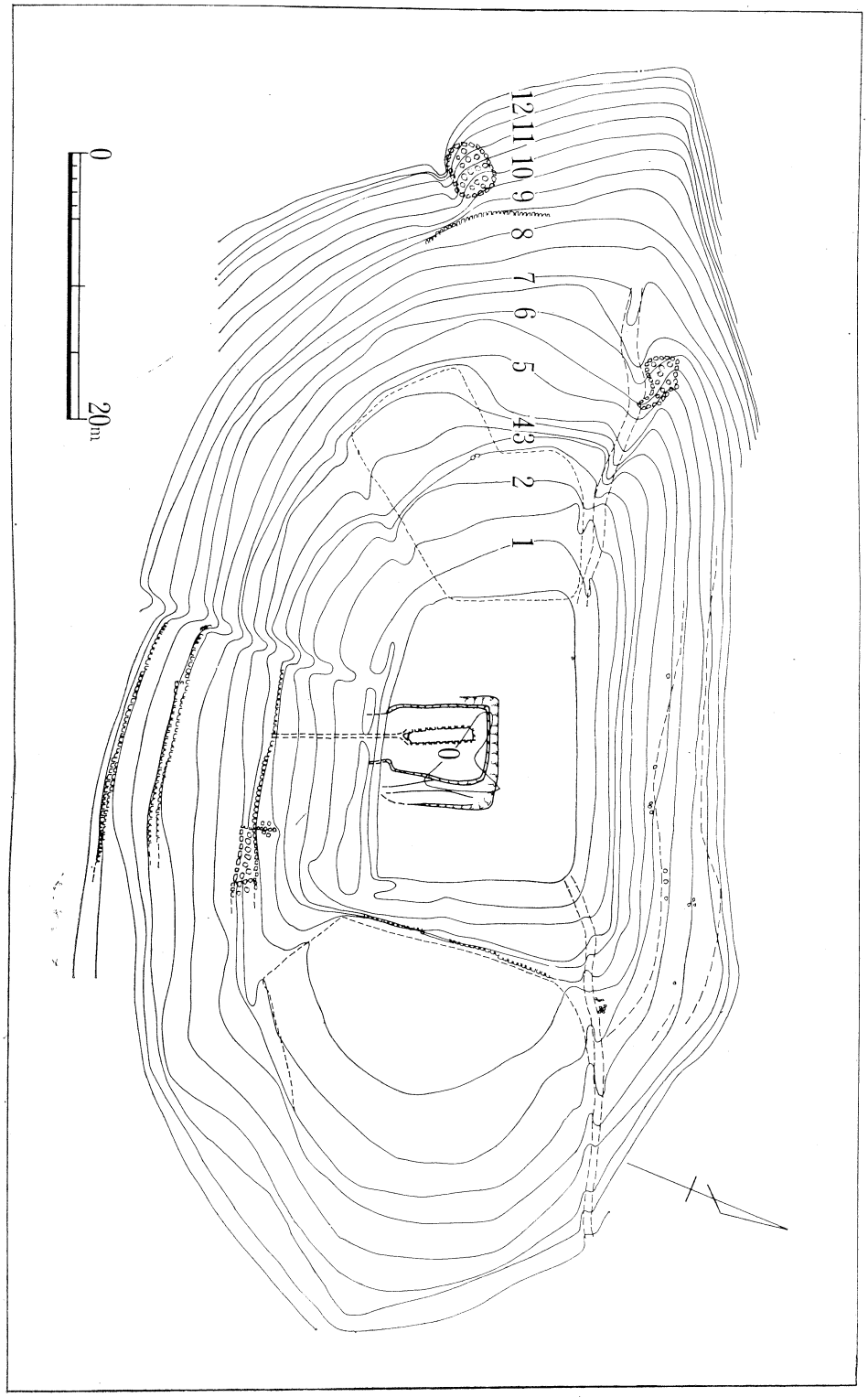
←第一号墳

←第二号墳

第三号墳
（西方から見る）



図版第三　墳丘実測図



図版第四　墳丘東斜面および東側列石

墳丘の東斜面

東側墳丘すその列石

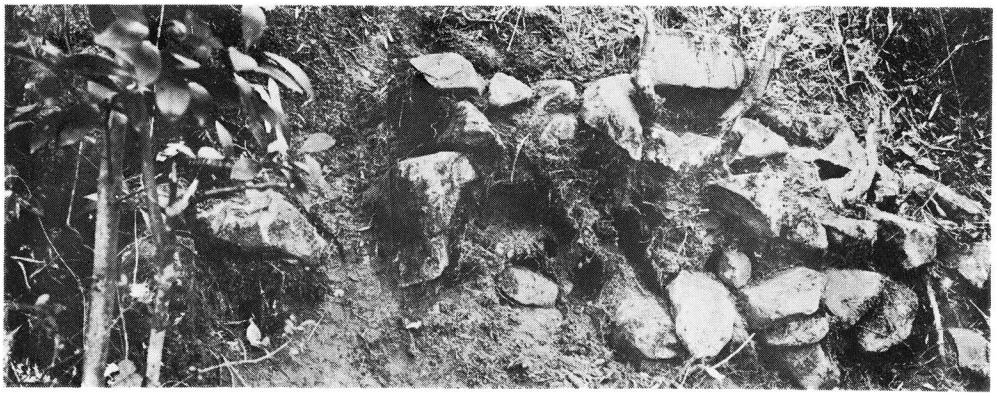
図版第五　南側第一列石および第二列石

南側第一列石（西から見る。手前の発掘したところの底に排水溝が見える）

南側第二列石

図版第六　南側第三列石および西側列石

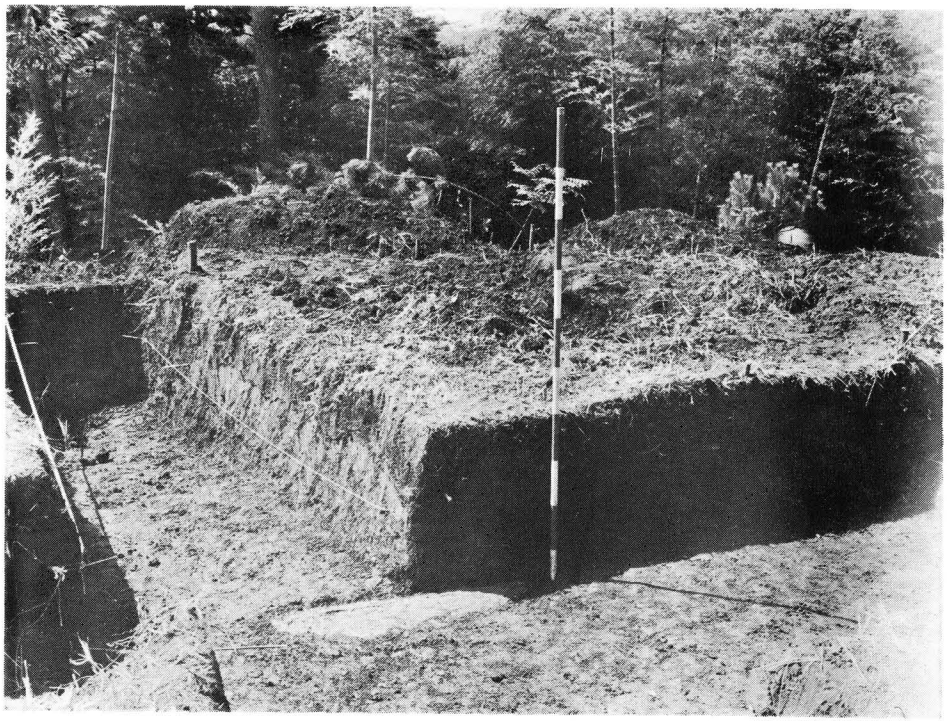
南側第三列石



西側列石

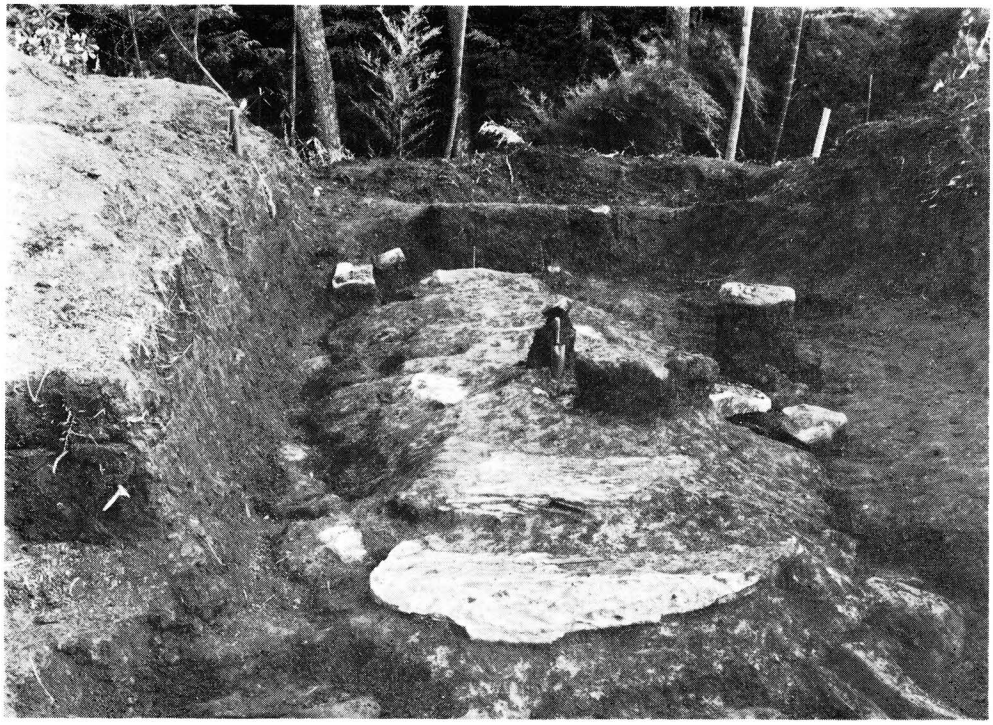
図版第七　墳丘頂上面およびⅠ・Ⅱトレンチ発掘状況

墳丘頂上面　発掘前の状態（中央Ⅰトレンチ一東から見る手前からⅡ$_3$、Ⅰ$_2$、Ⅰ$_1$）



Ⅰ$_3$区　蓋石検出の状況（手前はⅠ$_2$、左前方Ⅱトレンチ）

図版第八　墓壙と石室の蓋石（一）



蓋　石　粘土被覆状態（北方から見る）

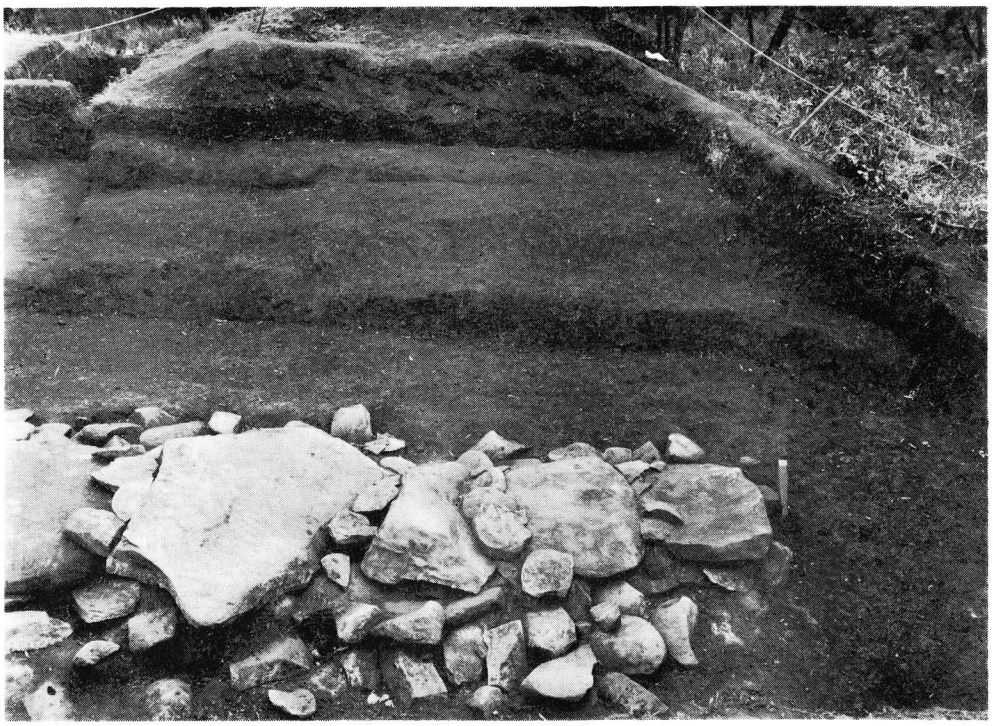
墓壙と蓋石の露呈状態（南方から見る）

図版第九　墓壙と石室の蓋石（二）

墓　壙　と　石　室（東から見る）

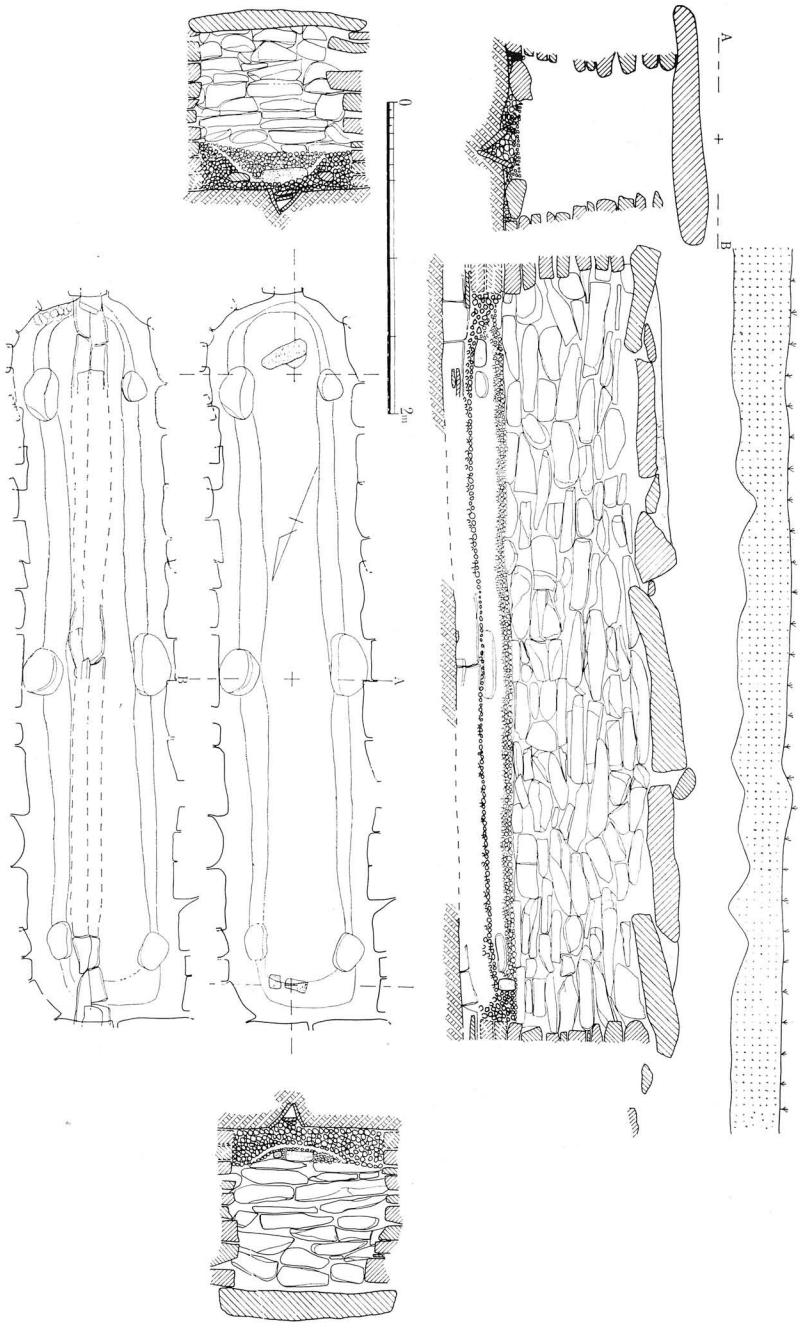
墓　壙　と　石　室（南から見る）

墓　壙　と　石　室（東北部を示す―西から見る）

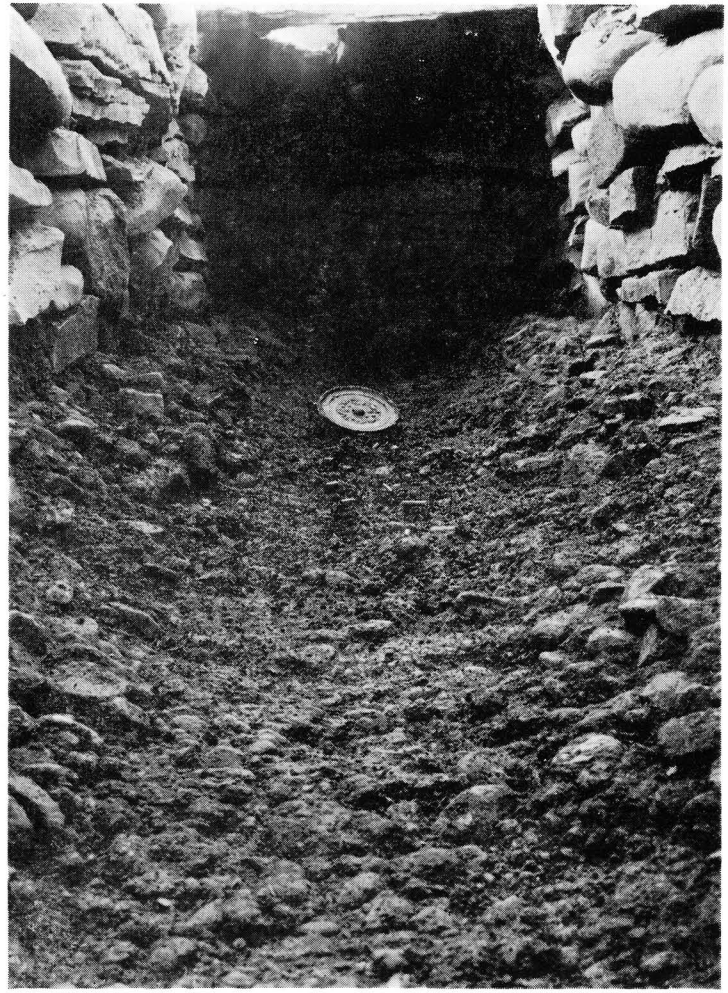


墓　壙　と　石　室（東南部を示す―西から見る）

図版第一一　石室実測図



石室内部（北から見る）



石室内部（南から見る）

図版第一二　石室内部の状態

遺物出土状態（南から見る）

遺物出土状態細部（南から見る）

鏡　出　土　状　態（細部）

石　室　側　壁（西北から見た東南隅の壁）

石室礫床下の排水溝
（中央部礫床を除いて溝の一部を示す。南から見る。）

石室東外側の排水溝
（手前は溝内の礫を除いて溝の構造を示す。南から見る。）

石室外の南の暗渠
（室内と室外両側と三本の溝はここで合流し左方（南）へ流れる。蓋石を除いて底の状態を示す。）

南側斜面を下る暗渠の蓋石
（斜面を下った溝が右方第一列石の下へと抜ける。）

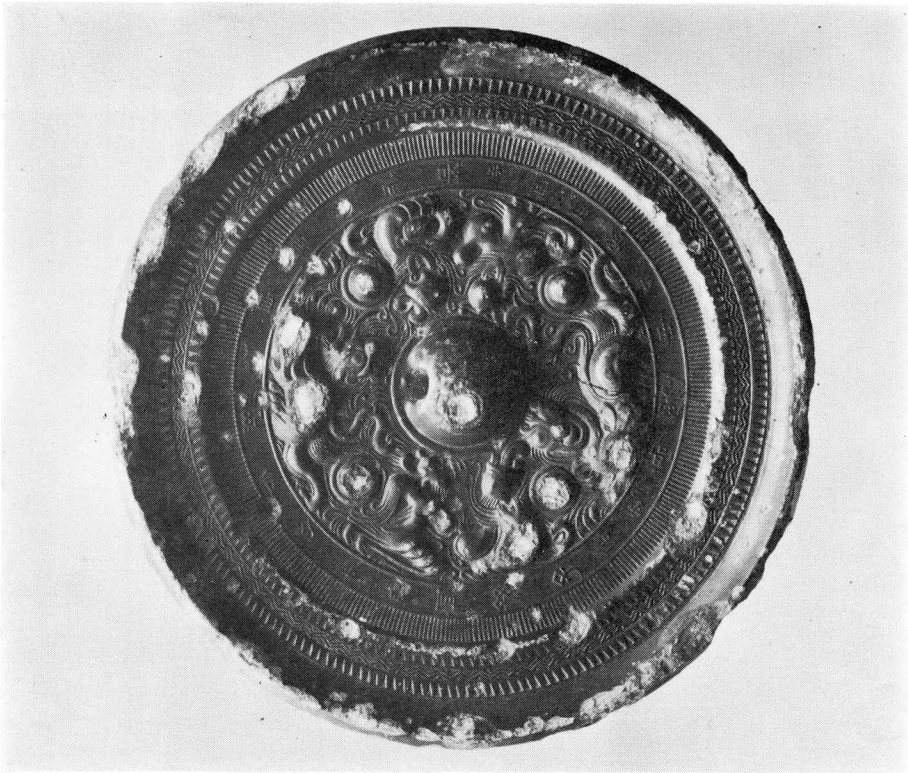
南斜面を下る暗渠
（蓋石を除いて内部を示す）

南側第一列石の下を通った暗渠
（さらに下方へと通ずる。左方は第一列石）

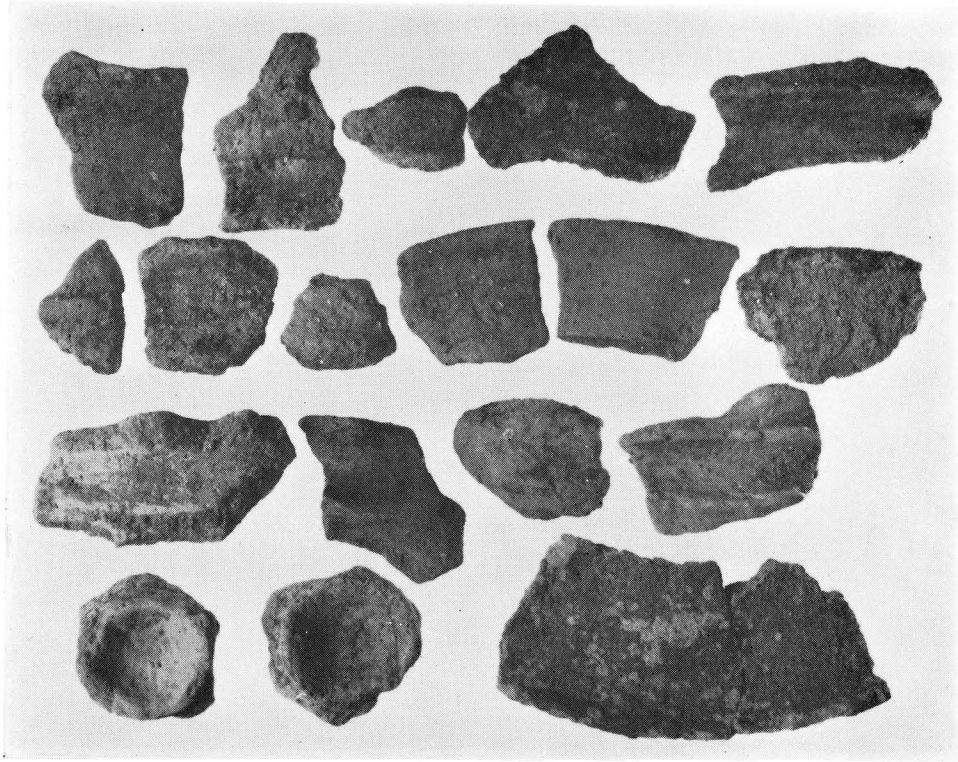
図版第一六　排水構造（二）

図版第一七　遺物（一）

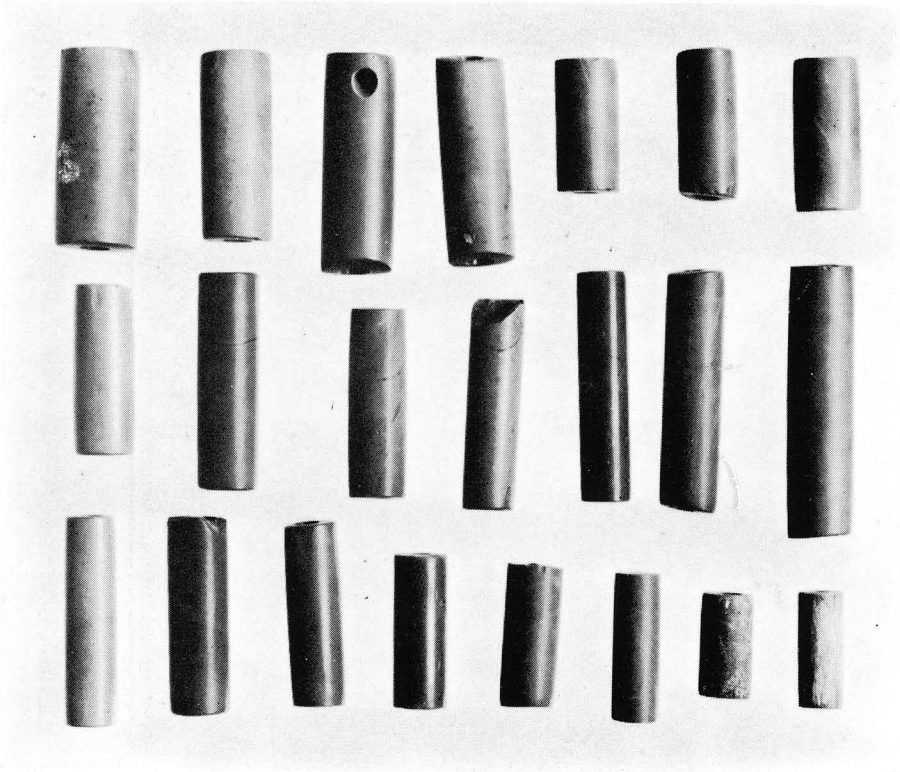
鏡



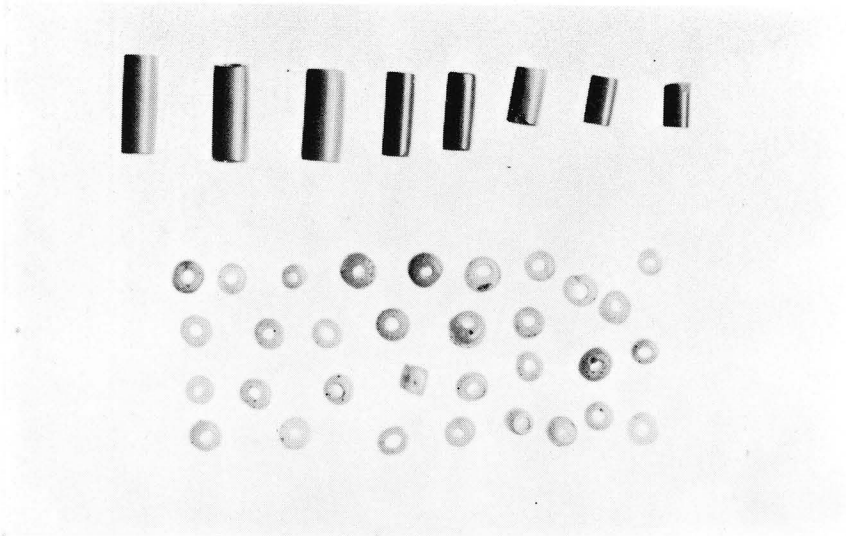
土師器



鏡　細　部

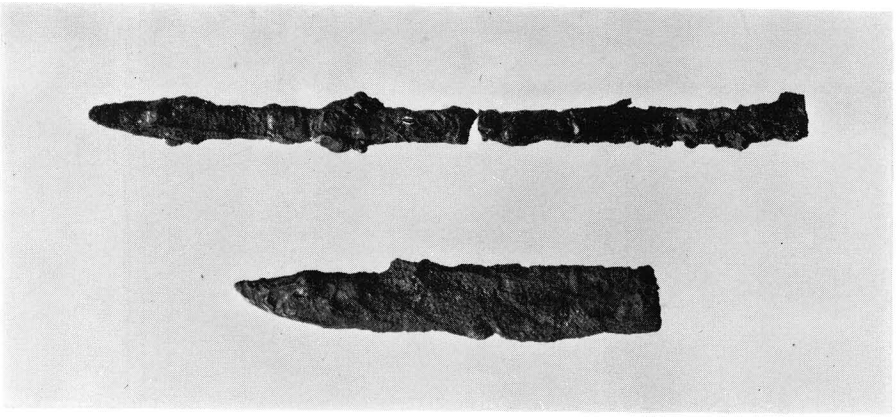


碧玉製管玉（太形）

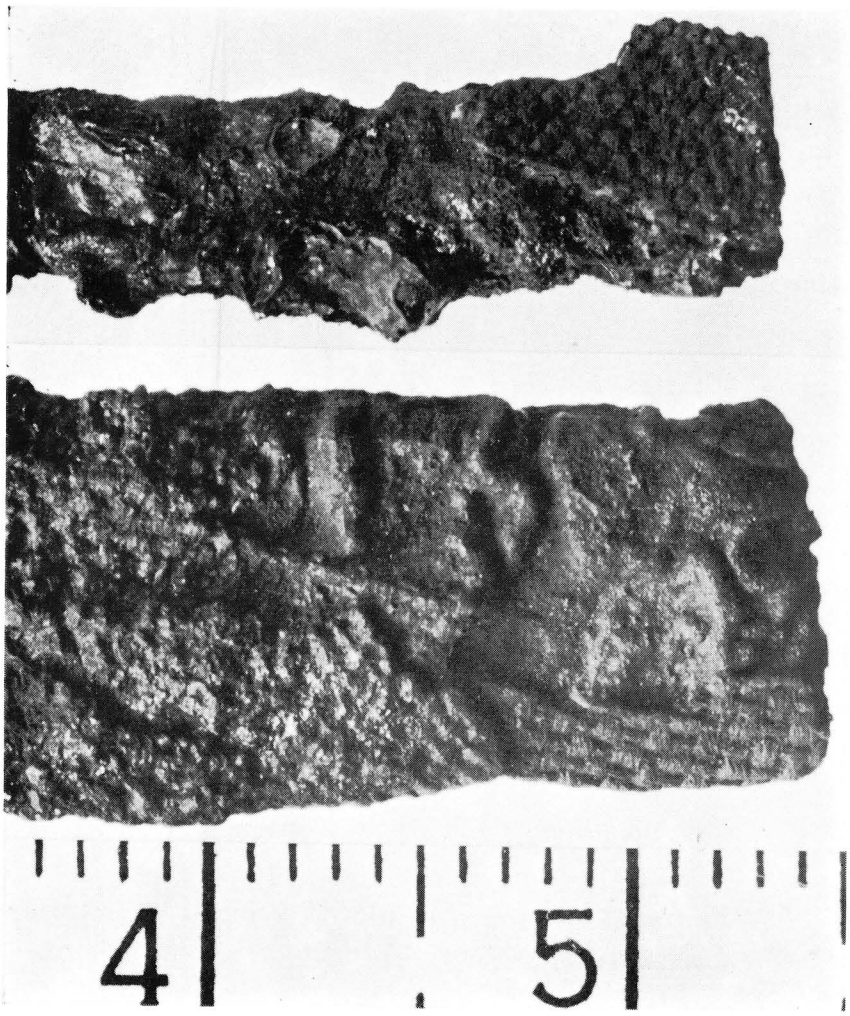


碧玉製管玉（細形）・ガラス製小玉

図版第二〇　遺物（四）



鉈（上）・刀子（下）



鉈と刀子に附着した織物の細部

造山第一号墳第一石室

鳥取県羽合町橋津馬ノ山第四号墳石室

昭和四十二年三月二十五日印刷
昭和四十二年三月三十一日発刊

松江市殿町一番地
発行所　島根県教育委員会

印刷所　株式会社　報　光　社